客坊寺跡西縁部の中・近世遺構

住宅建設に伴う客坊山遺跡群第１次発掘調査報告

2001　　財団法人 東大阪市文化財協会

目次

1. はじめに ……1
2. 調査地とその周辺の地形 ……1
3. 調査手順 ……2
4. 調査結果 ……3
　4.1 層序と各調査区の遺構 ……3
　　4.1.1 A地区……4
　　4.1.2 B地区……8
　　4.1.3 C地区……8
　　4.1.4 D地区……12
　　4.1.5 E地区……13
　　4.1.6 遺構のまとめ……17
　4.2 おもな出土遺物……18
5. まとめ ……18

例言

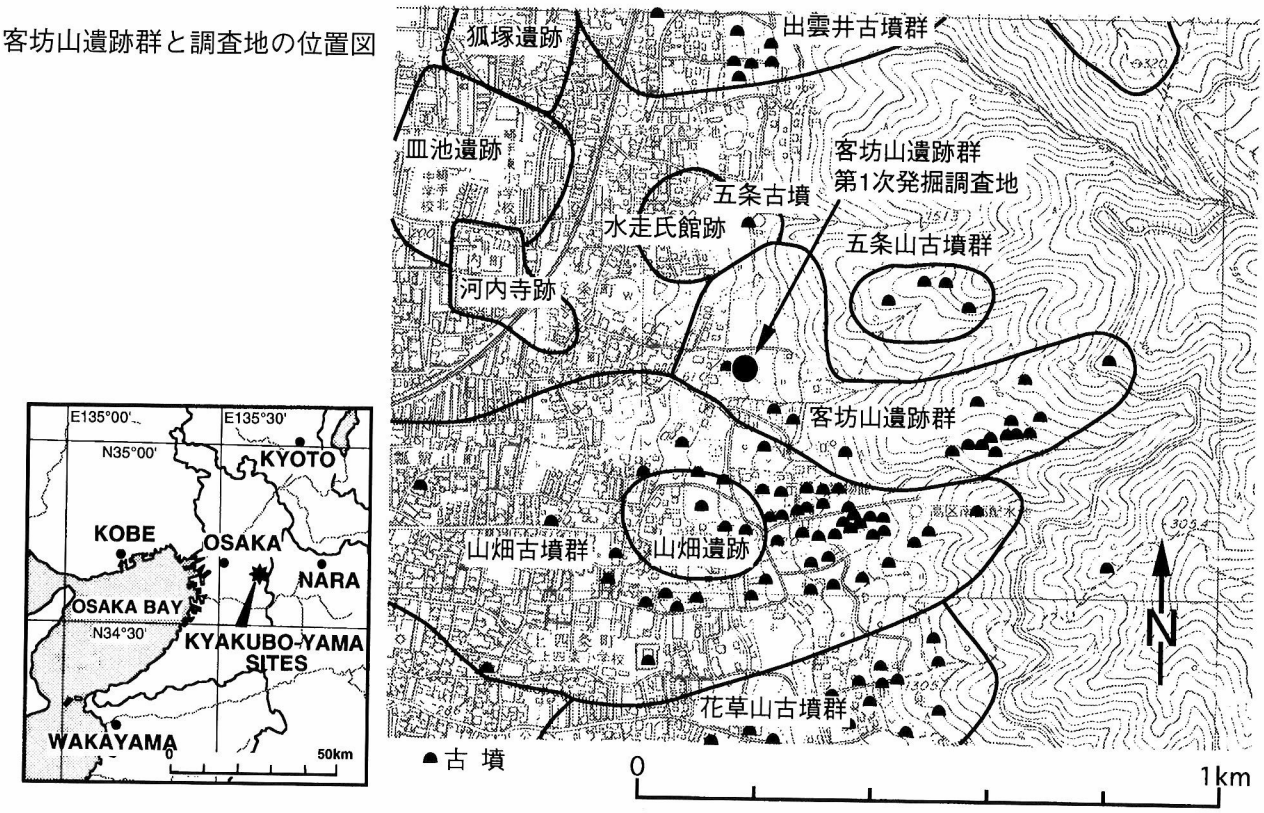
本書は、東大阪市客坊山遺跡群第1次発掘調査の概要報告である。本発掘調査の事業名は、「住宅建設に伴う客坊山古墳群遺跡第1次発掘調査」であったが、のちに東大阪市教育委員会によって遺跡名が「客坊山遺跡群」と改称されたため、これを表題としている。

本発掘調査事業は、株式会社城戸産業の委託を受け、東大阪市文化財協会が松田順一郎を担当者として実施した。発掘調査にかかる費用は城戸産業が負担した。同社の多大なご協力に感謝いたします。

現地の発掘調査補助員として、有山淳司、井口浩一、大倉克升、近田哲史、小西洋、小林修が参加した。また、遺物と調査記録の整理には石割珠貴、下尾哲弘、田中秀行、為井通子、辻徳子、夏原宜左子、西村慶子が補助員としてたずさわった。本報告所の作成にあたって、遺物写真撮影は株式会社GFプロに委託して行った。その他の作業は調査担当者による。

なお、出土遺物は本報告書刊行後、東大阪市教育委員会が保管する。

図1　客坊山遺跡群と調査地の位置図



客坊寺跡西縁部の中・近世遺構

― 客坊山遺跡群第１次発掘調査報告

1.　はじめに

客坊山遺跡群は、大阪府東大阪市南東部、客坊町の生駒山地の斜面からその直下の扇状地斜面上部に分布する、おもに古墳群と寺院跡・城跡を含む埋蔵文化財包蔵地である(図1)。古墳群は、昭和43年から45年にかけて大阪府立花園高校地歴部によって分布調査が行われ、古墳時代後期の群集墳として認知されるようになった。ほとんどの古墳は、横穴式石室をもつ円墳で、標高265mから70m付近までの山地尾根と扇状地斜面に分布する。その後、3号墳が、円筒埴輪をともなう古墳時代前期末(4世紀末)の前方後円墳であることがわかった(中西，1996)。いっぽう、14世紀には寺院が存在し、その後15世紀の争乱に際して城として利用されたことが、史料から知られる。(藤井ほか，1966；辻編,1964；東京大学史料編纂所編集,1985)。これらの位置については、調査地近傍で古瓦が採集されていることから、扇状地斜面上部で広い平坦面がある客坊氏神の社殿近辺を中心に遺構が分布すると予想されていた。

昭和62年12月に株式会社城戸産業によって、客坊町1075～1077、1081番地の約1520m^{2}の範囲で、住宅建設にともなう土木工事が計画された。しかし上述した古墳時代以後の遺構・遺物が工事によって破壊されるため、同社と東大阪市教育委員会との協議の結果、事前の発掘調査を財団法人東大阪市文化財協会に委託し実施することになった。当協会は現地の発掘調査を、昭和63年1月11日から3月31日まで行い、その後、調査記録と出土遺物の整理をおこなった。この報告ではその結果の概要を述べる。

調査地より上部の扇状地斜面に分布する寺院・城跡核心部の遺構・遺物については、第1次発掘調査の後に行われた第2次、第3次発掘調査によってさらに多くの成果が得られており、詳細はすでに刊行されている各調査の報告書を参照されたい(芋本・才原，1998; 中西，2002)。本報告では、寺域・城域の外縁部における土地利用の変化を推測した。

2.　調査地とその周辺の地形

調査地の東方130mにある、生駒山地西斜面の山脚基部の標高は約100mで、ほぼ南北方向にのびる断層によって平野部とは線状に画される。これより西方標高10mまでの、水平距離で約1.0kmの間に沖積扇状地ロウブの斜面が拡がる。南方には、客坊谷の沖積扇状地が、標高約150m付近を扇頂部として、扇端までの水平距離1.1km、ロウブの幅約0.3kmの大きさで拡がる。客坊谷は現在その北縁を流下している。調査地付近の堆積地形は、山地斜面の風化物質に由来する崩積性堆積物と、客坊谷と調査地南辺を流下し、客坊谷に合流する支谷からの、おもに土石流堆積物からなり、客坊谷扇状地の北側に付随するかたちで発達している。調査地付近の沖積扇状地斜面は、高度と傾斜にもとづき、標高110mから65m前後までの上位面、それより下位で標高約20m付近までの中位面、さらに下方で標高約6mまでの下位面に区分できる。標高約40m以上の中位面より上部で客坊谷とその支谷の著しい開析がみられる。そのため、国土地理院が1983年に発行した「土地条件図」は、調査地付近の上位面を「土石流段丘」と呼んでいる。65m付近の遷急線は調査地付近のみならず、南方の客坊谷扇状地の主要部や鳴川谷(長門川)扇状地にもみられ、断層変位によって古い扇状地面が山地とともに基準面に対して上昇したことを示す。支谷の谷口は標高110mである。そこから発達した上位面のロウブは、断層変位と人工改変によって不明瞭だが、調査地付近までは緩やかな凸型斜面をなす。開析谷の上位面下端付近から発達した沖積錐が中位面に明瞭にみとめられ、客坊集落はそのロウブ頂部から中央部に拡がっている。また、河内寺跡の領域は

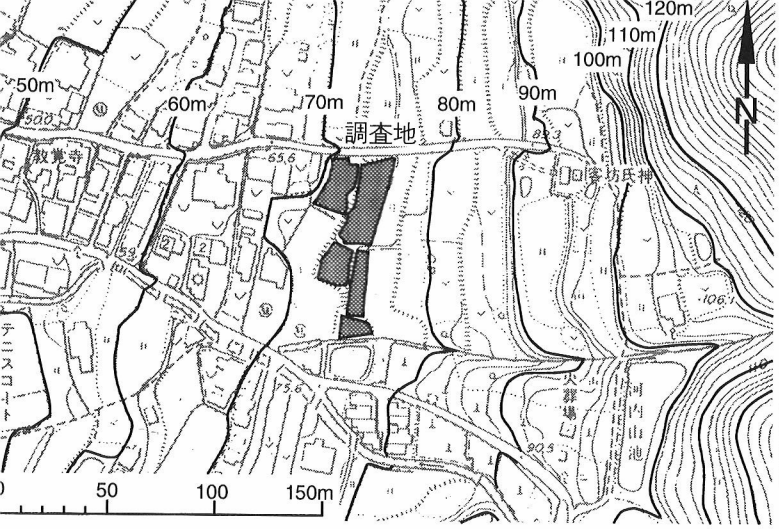


図2　調査地とその周辺の地形図。図の左下部分を西北西に客坊谷がのびている。調査地南端を細い支谷が流下し、約30m下流で客坊谷に合流する。

図3　調査地付近からみた東方の沖積扇状地上位面と山地斜面。写真右寄りの谷から調査地周辺まで土石流性の沖積扇状地斜面が拡がる。土石流堆積地形特有の、流下方向に波打つような起伏があり、棚田間の高度差に反映しているように見える。調査地周辺の全体の印象は凸型の斜面である。右手の尾根には客坊山古墳群、左手の尾根には五条山古墳群が分布する。撮影地点の標高は約85m。写真左手中位の電柱の向こうに客坊氏神の社がある。

図4　調査地付近からみた客坊集落(近景の屋根が並んでいる場所)と河内平野中央部。背後の山地斜面直下から集落までに分布する棚田の造成によって、過去の地形はかなり改変されている。棚田の崖面には、横穴式石室の石材と考えられる巨礫の見られる場所がある。扇状地斜面は棚田から集落に変わる標高約70m付近に傾斜変換線があり。やや急激に高度を下げる。これより下方には、形成年代の新しい沖積錐が発達しており、その扇端部付近に河内寺(こんでら)跡がある。

その裾から下位面、および北側の扇状地間低地にかけて拡がる(図3、4)。このロウブの発達に寄与した上位面の開析谷は、インターセクションポイントの位置からみて、客坊谷の本流よりもむしろ、調査地南側を流下する支谷である可能性が高い。また、後述するB地区の調査結果から、改修前の支谷は解析後、土砂で充填された状態であったことわかり、歴史時代には調査地付近の上位面に氾濫したことも予想される。

沖積扇状地各面の表層を構成する堆積物は、未調査だが、生駒山直下の辻子谷扇状地における扇状地ロウブの形成年代などから類推すると、上位面は最終氷期最寒冷期以後の更新統最上部、中位面は完新統で、低位面は完新統でもより新しく、弥生時代後期末ないし古墳時代初頭以後の堆積物と思われる。また、客坊集落が載る沖積錐は、歴史時代に発達した可能性がある。

3.　調査手順

調査地は前節で述べた沖積扇状地上位面の下部、客坊集落の上位に隣接する位置にあり、T.P.78.1mから71.9mまでの、4段5面の棚田が拡がっていた(図5)。調査開始まで、すでに休耕し、雑草が茂っていたため、まずこれらを刈り取った。一部はバックホウの進入路確保作業にともない表土とともに除去した。棚田圃面ごとにA～E地区を設定し、それぞれの地区で遺構検出、遺物採集を行った。

掘削残土が搬出できないため、E地区を残土置き場にし、A,C地区の調査を始めた。A地区調査終了後、そこを残土置き場にしてB地区を掘削した。D地区の残土もE地区に仮置きし、C,D地区の調査終了後、両地区を残土置き場にしてE地区を調査した。各地区では、層厚20～10cmの耕作土を機械掘削し、その後人力掘削をおこなった。検

出された遺構は写真撮影を行うとともに、平面実測図を作成した。出土遺物は、遺構や堆積層、および平面位置ごとに採集した。各調査区の1、2か所には、掘り残しの畦を設け、堆積層のようすを観察・記録した。以上の手順による各調査区の掘削面積は合計約1110m2だが、1260m2の調査地のうち、調査区間の棚田にともなうもっとも新しい石垣部分は、おもに機械掘削によって状況を調べた。

図5　調査開始前後の風景。調査地南側の開析谷をはさんで、客坊墓地から北西方向に調査地を撮影。バックホウのいる場所はA地区南端部。

本調査では、期間が限られていたため、おもに中世の遺構が検出される層準で、調査区全面にわたる掘削を終了した。これより下位の層準については、上述した断面観察用の畦沿いにトレンチを設け、堆積層を観察したほか、部分的に機械掘削によって、下位層準における遺構・遺物の有無を確認した。

4.　調査結果

4.1　層序と各調査区の遺構

本節では、調査地全体の層序の概略と、各調査区で検出された遺構について述べる。B地区を除く遺構の平面図と堆積層断面図を図7、17、27、30に示す。おもに中世の遺構が検出された層準は図示した。遺構のベースをなす堆積層は、人工改変によって調査区間での連続性が悪く、層相も異なるが、「3層」をあてはめるようにした。なお、以下の記載では堆積層の厚さをとくに数値で示さないので、断面図を参照していただきたい。

1層は、近過去から現代まで継続的に使用されていた耕作土および耕盤をなす盛土、さらにそれらを材料とする盛土や石垣からなり、2層はさらに過去の耕作地造成にともなう盛土からなり当時の作土を含むとともに、上位の作土の耕盤をなす。2層にはより下位の、おもに3～5層の堆積物がかなり混じり込んでいた。出土遺物のほとんどは2層から採集されたものである。

3層は層相によって2、3の堆積層に細分された。明瞭な流水堆積物はほとんどみられず、人為的な盛土、斜面のマスムーブメントよる堆積物とその二次堆積物と考えられる。下位の4層以下の堆積層の層理は沖積錐の斜面方向にほぼ調和的で、基本的には自然の堆積層と考えられる。3層は下位層からなる斜面の起伏を埋めており、場所によって層厚の差が大きい。3層の堆積上面は2層堆積時の切土部分で大きく失われていることから、逆に3層上面は、後世の棚田のように平坦ではなく、緩斜面を残していたと考えられる。

3層上面で検出された遺構には、ピット、土壙、溝、石組などがある。これらのうち、ピットと小型の土壙には、3層堆積時から2層の堆積時までに人為的な擾乱によって大型の大礫や巨礫が下位層から抜け去り、その窪みに上位堆積物に充填された、偶発的なピットが含まれるおそれがある。しかし、一定の配列をなしたり、浅くとも輪郭が明瞭なピット、長辺が1mを越す規模の土壙などは、一応人間の造作によるものとみなす。また、これらには2層よりも砂礫に富む3層に

図6　調査地区の配置と座標系。UTM座標系ゾーン53における国土座標第VI系による。

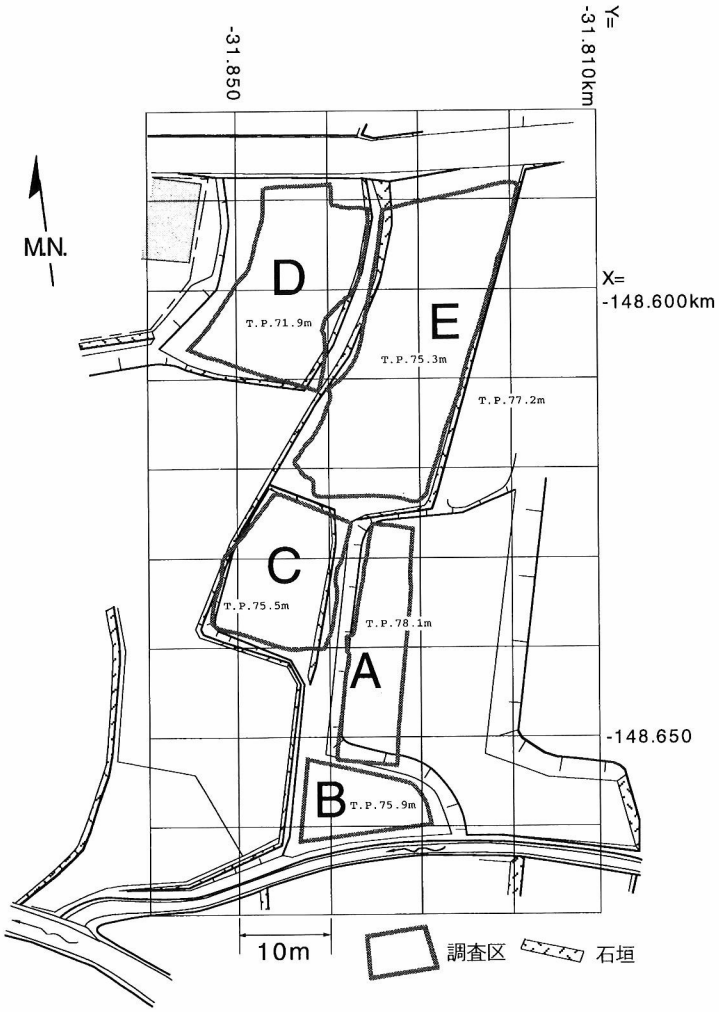


表１　Wentworthの堆積物粒径区分

粒径階の区分(mm)	粒径階
>=2048	極大型の巨礫 (very large boulders)
2048～1024	大型の巨礫 (large boulders)
1024～512	中型の巨礫 (medium boulders)
512～256	小型の巨礫 (small boulders)
256～128	大型の大礫 (large cobbles)
128～64	小型の大礫 (small cobbles)
64～32	極粗粒の中礫 (very coarse pebbles)
32～16	粗粒の中礫 (coarse pebbles)
16～8	中粒の中礫 (medium pebbles)
8～4	細粒の中礫 (fine pebbles)
4～2	細礫 (granules)
2～1	極粗粒砂 (very coarse sand)
1～1/2	粗粒砂 (coarse sand)
1/2～1/4	中粒砂 (medium sand)
1/4～1/8	細粒砂 (fine sand)
1/8～1/16	極細粒砂 (very fine sand)
1/16～1/256	シルト (silt)
1/256=<	粘土 (clay)

似た層相を示す充填堆積物がみられた。石組(あるいは石垣)は、A地区の石組溝以外は、3層下底ないしは同層内の層準で構築され、同層堆積期間中に崩壊し、さらに2層堆積時までに削平されたと考えられる状態で検出された。この遺構破壊・埋没過程については、3層形成過程とともにさらに検討を要する。

遺構平面図の等高線は、現地調査で遺構近傍と、原則的に1mメッシュでほぼ全域について測定した高度データから、コンピュータプログラム(MacGridzo)によって算出、描画したものである。起伏の再現はおおむね妥当と思われる。上述したように、石組のほとんどの部分は、この等高線によって表現されている面の直下に分布する。遺構描画部分の添字は遺構の最大深で、単位はcm。遺構の呼称は、現地調査での呼称を適宜変更した。

4層の一部には、下位堆積物の砂質泥のブロックが含まれ、人為的な擾乱の印象がある。しかし、堆積面付近で起こる流水やマスムーブメント、植生発達にともなう擾乱などの複雑な過程を想定すると、ブロック土の混在はただちに人間活動の証拠とはならない。遺跡形成のスケールに適合する斜面過程は未だ不明な点が多い。下位の5層以下の堆積層は4層以上の堆積層に比べ、いくらか締まった状態で、塊状をなす泥がちの土石流堆積物である。いわゆる「ぢやま」である。ところによって不明瞭な層理が見られ、A地区断面図に記載した6、7層はその一部である。すでに述べたように、これらの堆積物が沖積扇状地上位面を実質的に構成しており、晩氷期(1万数千～1万年前)に堆積した更新統最上部に相当すること、山畑遺跡の同じ地形面でナイフ形石器が、本遺跡の第2次調査で有茎尖頭器が採集されていることなどは、とりあえず調和的である。低位段丘構成層と判断するには、開析の程度が弱い。将来、より科学的な年代決定が望まれる。

以下の記載で石組遺構など石材を表現する際には、Wentworthの堆積物粒径区分にしたがった(表1)。石材はあまり円磨されておらず亜角礫で、粒径の小さい礫は見かけ上亜円形状を呈するものがある。岩石種は、背後の山地斜面や現地の扇状地斜面で調達できる、角閃石斑レイ岩、黒雲母花コウ岩であった。これらの点については、以下で個々に述べない。

4.1.1　A地区

本調査区(図7)は、南北25m、東西6.5m、調査面積約148m^{2}で、調査地のもっとも高位にあり、耕作土の上面で平均T.P.78.1mであった。同じ高さで東から拡がる一枚の棚田の西部にあたり、南北に隣接する棚田より一段高く西に張り出した形をなす。

調査区の北縁部は、もとの棚田の低い石垣が構築されていたが、その高さはA、E両地区の比高3m弱の半ばまでであった。機械掘削の進入路を確保するため、これをバックホウで除去した。さらに石垣の裏込め土を除去すると、約50°の北落ちの斜面をなして、E地区寄りには5層が、A地区のx=-148.630mライン付近から2、3層が露出したため、機械掘削を止めた。

調査区の南端部は、B地区との間の崖になっていたが、その形状に沿った遺構はとくに検出されなかった。その近傍にも土壙が分布することから、後述するB地区の流路の谷壁は中世以後に侵食あるいは掘削されて形成された可能性が高い。

1層は調査区全体に分布し、その下位のほとんどの領域では2層がみられたが、調査区東縁部では3層上面の高度が高く、2層を欠いて同層上面を切るかたちで載っていた。3層上面は、調査区全体で西に向かって緩やかに傾斜しており、南西部でやや急に高度

を下げていた。この部分は、２段下の棚田が斜面直下にせまり、もとの急傾斜を反映している。

本調査区では、長方形の土壙が、これに類似するものを含め５基検出された。これらのうち、土壙１、３、６の長辺は1.8～2.2mで少し不揃いだが、短辺は約0.85～0.9mでほぼ等しい。これらは後述する「拡幅変異形」に対し、「伸長変異形」とみなせる。またこれらの長辺は南北方向に配置されている。長方形の一端が円形をなす土壙２は、東西方向に配置されているが、これらと同種の土壙と考えられる。土壙１、２、３は調査区の北部でひとかたまりになって分布するが、土壙３は検出面が他よりもやや低く、他の土壙と形成・埋没時期が少し古いと考えられる。土壙２には大礫、小型の巨礫サイズの石材が集積されていた。しかし、これらの礫が側壁に組まれていた形跡はほとんどない。土壙廃絶時に投棄されたものの可能性が高い(図８、９)。長方形の土壙のなかで土壙４(図10)は、長辺1.8m、短辺1.2mで上述した土壙のうちやや小振りのものを短辺方向に拡張したような大きさで、長辺は南北方向。前述した「拡幅変異形」である。以上の土壙の側壁には、とくに造作はなく、素掘りの状態で検出された。検出面からの深さは、土壙１が77cm、土壙２は55cmで、それ以外は浅い。上部をかなり削平されているということであれば、逆に土壙１などは、もとはかなり深かったことになる。なお、長方形土壙の分布は調査区の西半部に限られることも注意を引く。長方形土壙のほかに、不整形な土壙が２、３検出された。このうち調査区中央部東縁で一部のみ検出された土壙７は、上述の長方形土壙と同種のものかもしれない。

溝状のくぼみが調査区中央部東寄りに３基、西端に１基分布する(図11)。掘りすぎたため、深さは図に記載したよりも浅い。底の高さがほぼ一定した溝の上部が削平されて残ったものではなさそうだが、いずれも長辺の延びは東西方向で、溝の一部であった思われる。

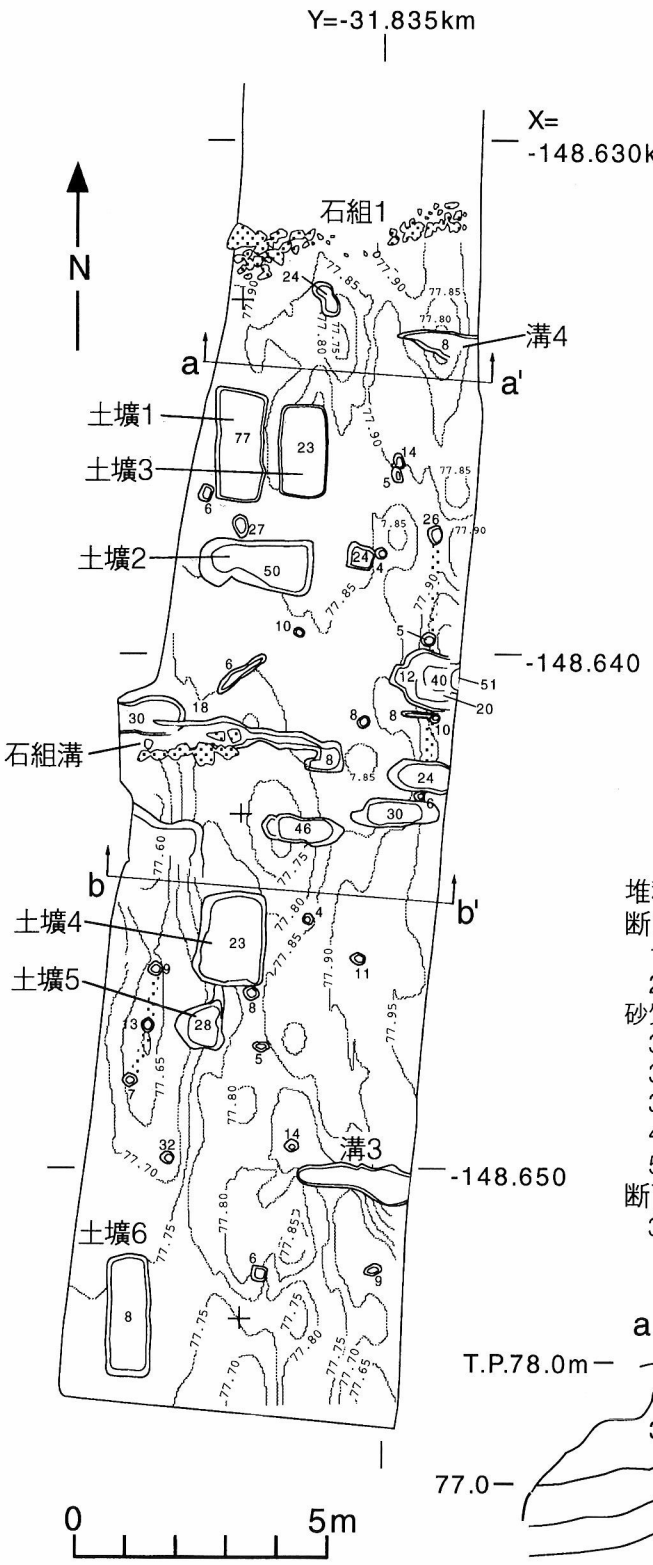
溝遺構は、調査区中央部で、南北方向に石組溝(図12)が検出されたほか、調査区北部と南部(図13)で南北方向の溝が１条ずつ検出された。これらの溝間の距離は、約8mで、調査地付近を南北の領域に等分しているように見える。巨礫から大型の中礫クラスまでの礫を積み上げ、おもに巨礫クラスの石材は溝の内側に面を揃えている。石組部分の溝幅は約60cmで、ここに東側から幅20cmの細い溝が連結している。

本調査区北部では、石垣をなしていたと考えられる、東北東-西南西の一連の延びを示す石列と礫の散布が検出された(石組１、図14、15)。これらは3a層、3b層中に埋没していた。ただし、この場所の両層を盛り土とみれば、このような状態がほぼ同時の堆積過程で起こり得ることである。西寄りの部分では、小型から中型の巨礫の面を揃えて並べた石垣の1段分がみとめられた。砂礫質シルトをマトリクスとする粗粒の大礫から細粒の中礫を石垣の裏込めに用いている。東寄りの主として大礫から中礫の散布は、石垣表面の巨礫が抜き取られ、裏込めだけが残存したものと考えられる。散布位置から、石垣の前方に崩れたものと判断される。石垣跡はいくらか西方に連続していたと思われるが、A-C地区間の斜面が切土され、法面が成形された際に破壊されている。

すでに述べたように、ピットのなかには、不確かなものが含まれるが、おおむね列をなすと思われるものが、中央部東辺と南部西辺で検出された。前者は直径15～20cmのピットで1.5～2mの間隔で４つ並んでいた。後者は直径約15cmのものが1.1m間隔で3つ並ぶ。建物の柱穴ではなく、柵の支柱あるいは別の目的の杭などと考えられる。

３層上面から同層中の遺構を調べたのち、５層まで機械と人力で掘削を進めた結果、調査区中央部で、５層上面を侵食して生じた幅0.3～1.4m、深さ0.3～0.6mの流路を検出した(図16)。幅・平面形状が一見不規則で、流路底はステップ・アンド・プール状の起伏がみられた。斜面に生じた小規模なガリーの跡とみなされる。泥分に富む砂礫で充填されていたが、その中から６世紀代の須恵器の破片がみつかった。

図８　土壙２の検出状況。北西方向に撮影。



堆積層の色調と粒度

断面a–a'

1　5Y 3.5/1 砂質シルト(耕作土)

2　2.5Y 3.5/2

砂質シルト(上面は耕盤、炭片、土器片、粘土ブロックまじる)

3a　5のブロック土

3b　2.5 5/3　中～細礫まじり砂質粘土質シルト

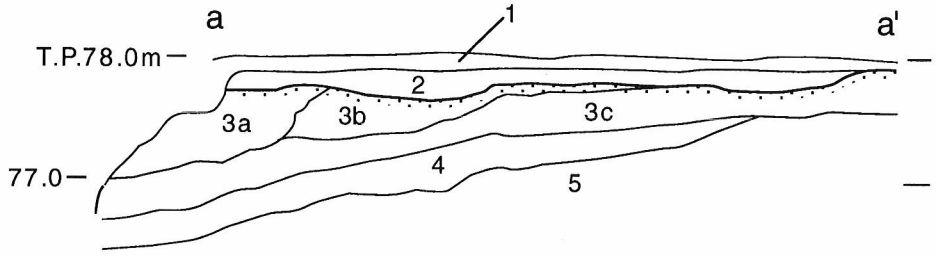
3c　10YR 4/2　細礫まじり粘土質シルト

4　10YR 4/4　砂礫まじりシルト質粘土

5　2.5GY 4.2/1 大礫～中礫まじりシルト質砂 (更新統)

断面b–b'

3b　2.5Y4/2 細礫～砂まじり粘土質シルト(上位層より礫少ない)



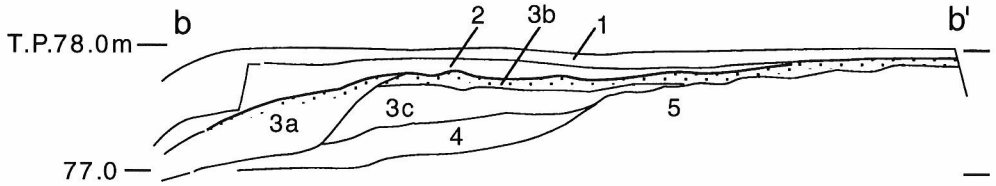


図７　Ａ地区 3a～c 層、５層上面で検出された遺構の平面図と同地区堆積層断面図

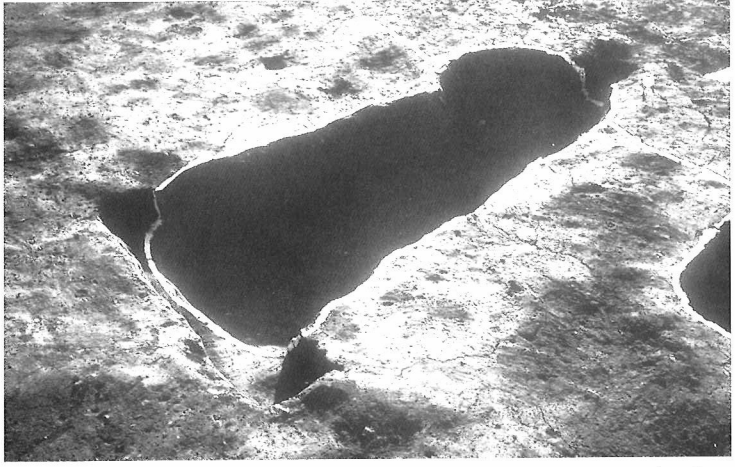


図9　土壙2の完掘状況。南西方向に撮影。向かって右側の丸い部分がその他の部分と切り合っている形跡はなかった。礫は全体に充填されていた。

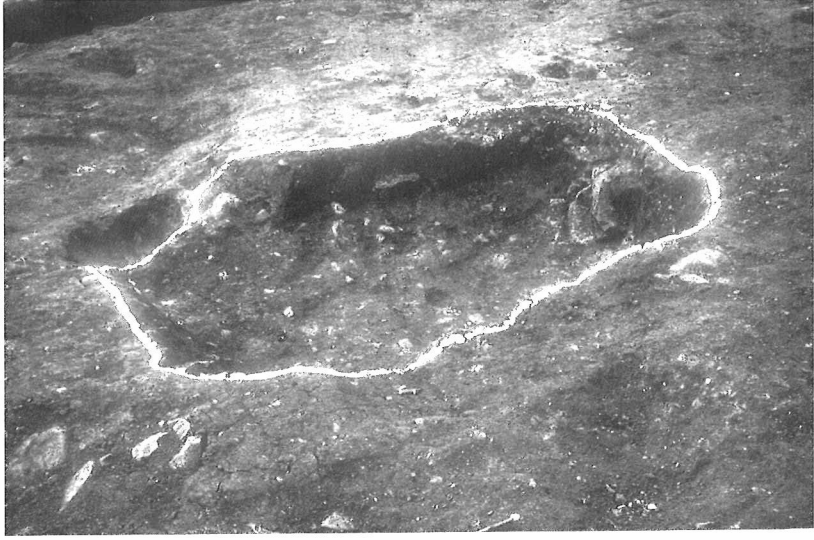


図10　土壙4の完掘状況。北西方向に撮影。

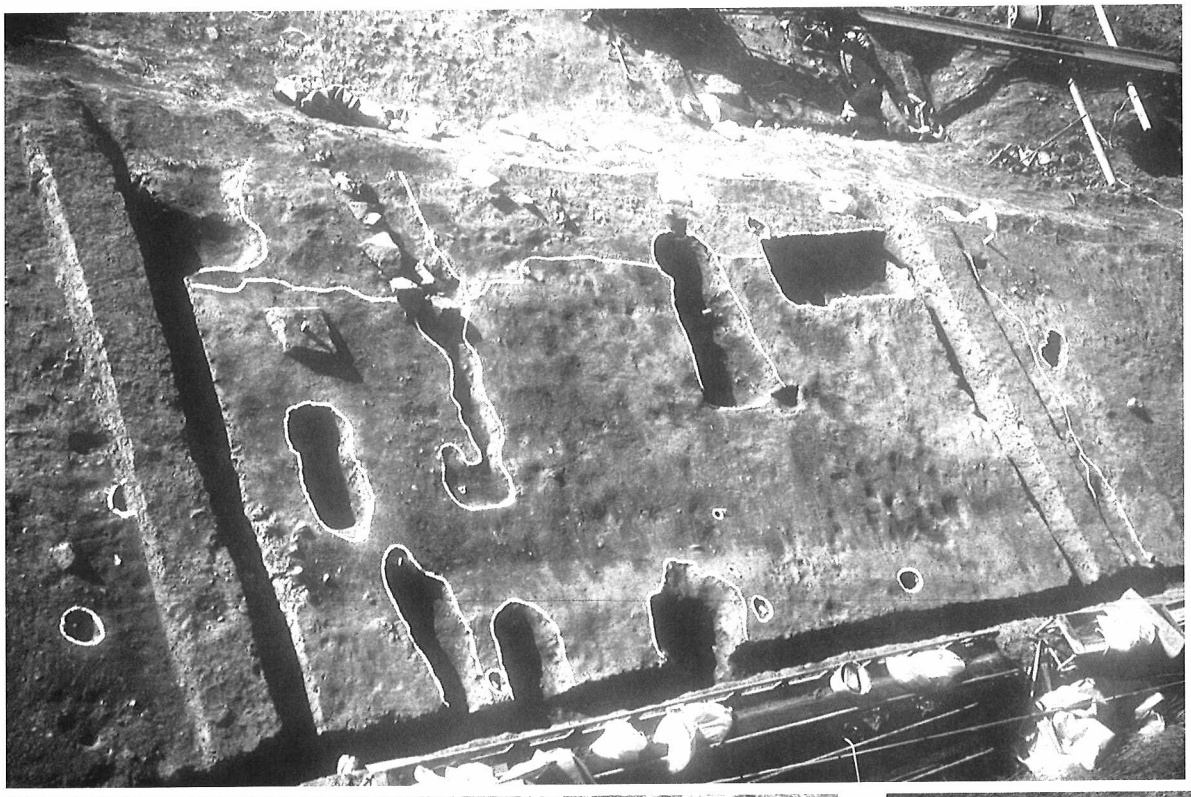
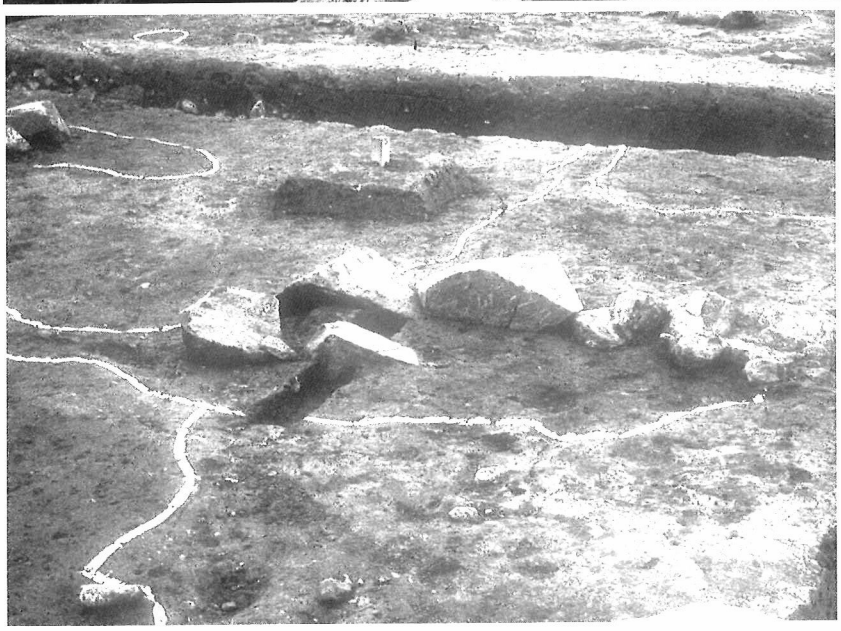


図11　A地区中央部の遺構。北西方向に撮影。土壙3は未検出の状態。

図13　A地区南部のピット群と溝。西方向に撮影。中央部に礫が分布し、東西方向に級化している。



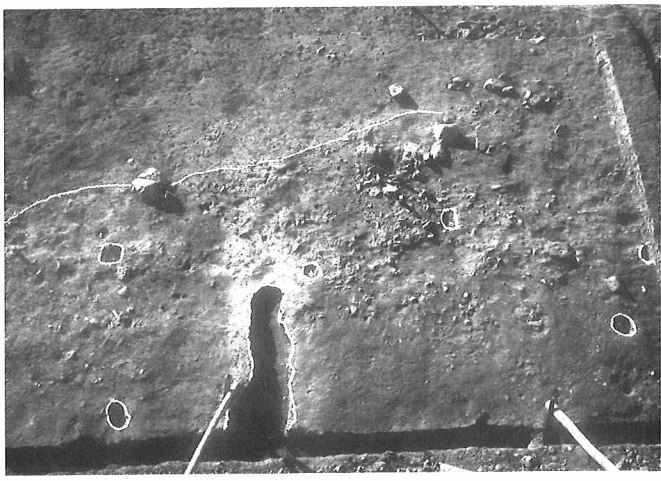


図12　A地区石組溝の検出状況。中央の白線より右側(西)は3a層の盛土分布域。南東方向に撮影。

図14　A地区北部の石組1の検出状況。左上の一段高いところが3層上面。南西方向に撮影。

図15　A地区北部の石組1、西部分の状況。石垣裏側から北方向に撮影。

図16　A地区中央部、5層上面の古墳時代のガリー跡。北西方向に撮影。

4.1.2　B地区

本調査区は、調査領域の南端部にあり、南北8m、東西13.5m、面積約91m²。機械掘削でその一部の堆積層を調べたところ、T.P.79.5mの地表をなす約0.3mの耕作土層の下には、地表下約0.5mまでに緑灰色の砂質シルトがみとめられた。さらにその下位には、暗緑灰色のシルト薄層を数枚挟んで累重する小型の巨礫以細の礫と砂からなる砂礫層がみとめられた。本層はA地区南辺の棚田の崖面をなす砂礫質粘土質シルト層(5層以下の堆積物)が侵食され、その後流路を充填した堆積物と考えられる。この砂礫層の下底は確認できなかったが、地表下約2.5m以下にも続くことを確かめた。

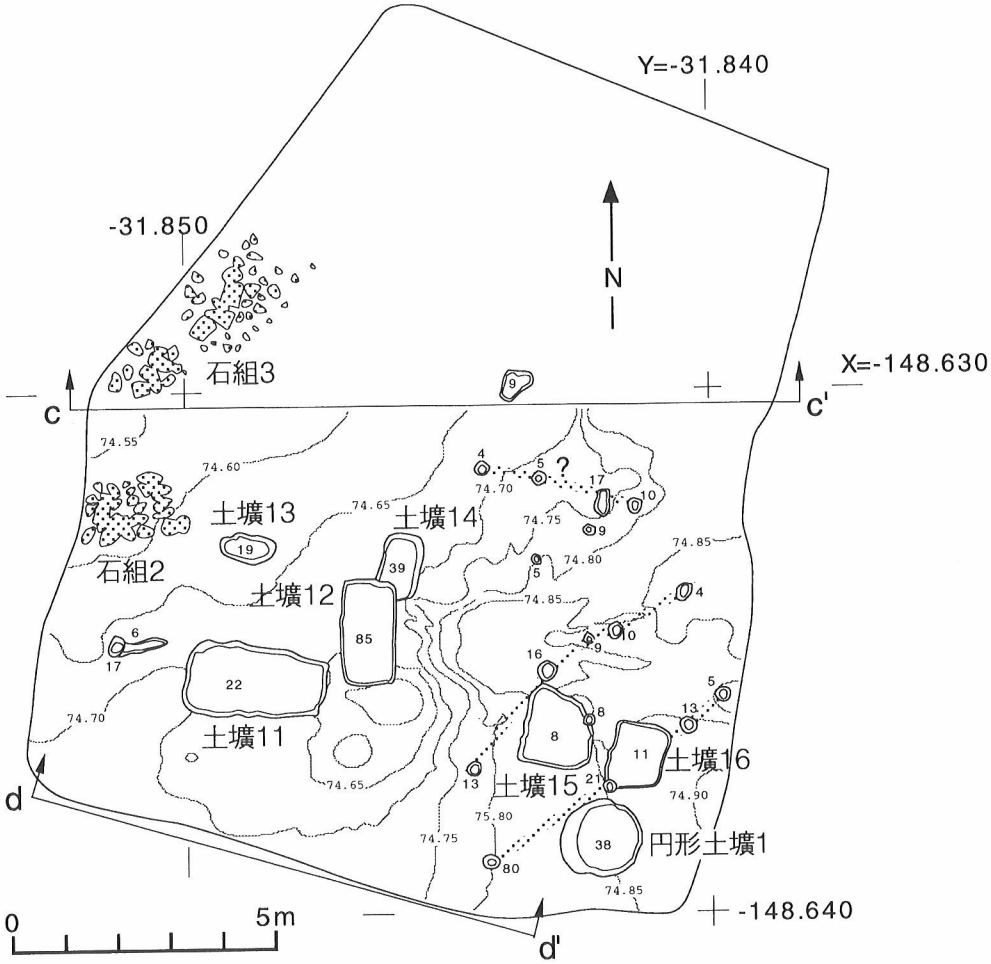
耕作土層直下のシルト層には周辺から、谷壁を削って投入されたと考えられる灰黄色の砂礫質粘土質シルトや、砂質粘土質シルトからなるブロック土が混じっていた。これらの地層からは、近代の遺物が出土した。本調査区は、東方から流下して客坊谷に合流する支谷の右岸にあたり、水田造成以前には流路の一部であったと考えられる。また、この調査地南側の開析流路の幅は、現在改修されて両岸の幅は約3.5mだが、A-B地区南辺の崖を谷壁とすると、約10mの満水時谷幅が想定される。すでに述べたようにA地区の遺構の分布が南端部で唐突に終わることから、この谷幅は中世以後、近世にかけて増大したと考えられる。この流路充填堆積物の掘削は谷の護岸構造物に影響をおよぼすと判断されたため、上述の一部分の掘削をもってB地区の調査を終了した。

なお、緑灰色砂質シルト層からは、近代の遺物に混じって平安時代のものと思われる蓮華文軒丸瓦が出土した。

4.1.3　C地区

C地区(図17)は、調査地斜面の中位にあり、耕作土上面はT.P.75.1mであった。南北17m、東西11.5m、面積186.5m²。ほぼ同高度で南側に隣接するB地区からは約90cm低く、北側に隣接するE地区に対しては約30cm低い。東側に隣接するA地区からは3m低く、下部に犬走りと石垣をともなう大きな段差を介していた。石垣は調査区北縁のE地区との境まで低く連続してめぐっていた。機械掘削によって、A地区との間の段差を覆う1層相当の盛土と石垣およびその裏込め土を除去すると、A地区西辺の2、3層が法面の最上部に断面を見せ、その下に5層以下の堆積物が約50°の斜面をなしていた。A地区北部の石垣西端はこの切土で破壊されたと考えられる。このもっとも新しい切土の状況は、以前の法面をさらに削り込んでいるのであろう。後述するように、古い切土の程度や年代は、C地区の東寄りに分布する遺構のあり方や年代と関連する。

本調査区では、1層を除去すると、東寄り1/3ほどの領域には5層が、その他の西寄



堆積層の色調と粒度

断面c–c'

1a 5Y3.5/1 砂質シルト(耕作土)
1b 2.5Y3.5/1 砂礫質シルト(耕作土)
1c 2.5Y3.5/1 砂礫質シルト(耕盤、整地層)
2 10YR4.5/3 粘土ブロックまじり砂礫質シルト(床土、整地層)
3a 5Y4/2 砂礫質シルト(不明瞭な溝の充填堆積物)
3b 2.5Y4/2 砂礫質シルト(石垣の裏ごめ土)
3c 5GY 3.6/1 巨礫～細礫まじり砂質シルト質粘土
4 大礫,中礫のい多い下位堆積物のブロック土
5 2.5GY 4.2/1 大礫～中礫まじりシルト質砂(更新統最上部？)

断面d–d'

4a 7.5Y3.8/1 巨礫～細礫まじり砂質シルトと5のブロック土
4b 2.5GY 4.2/1 粘土まじり細粒砂(大礫～中礫まじる)

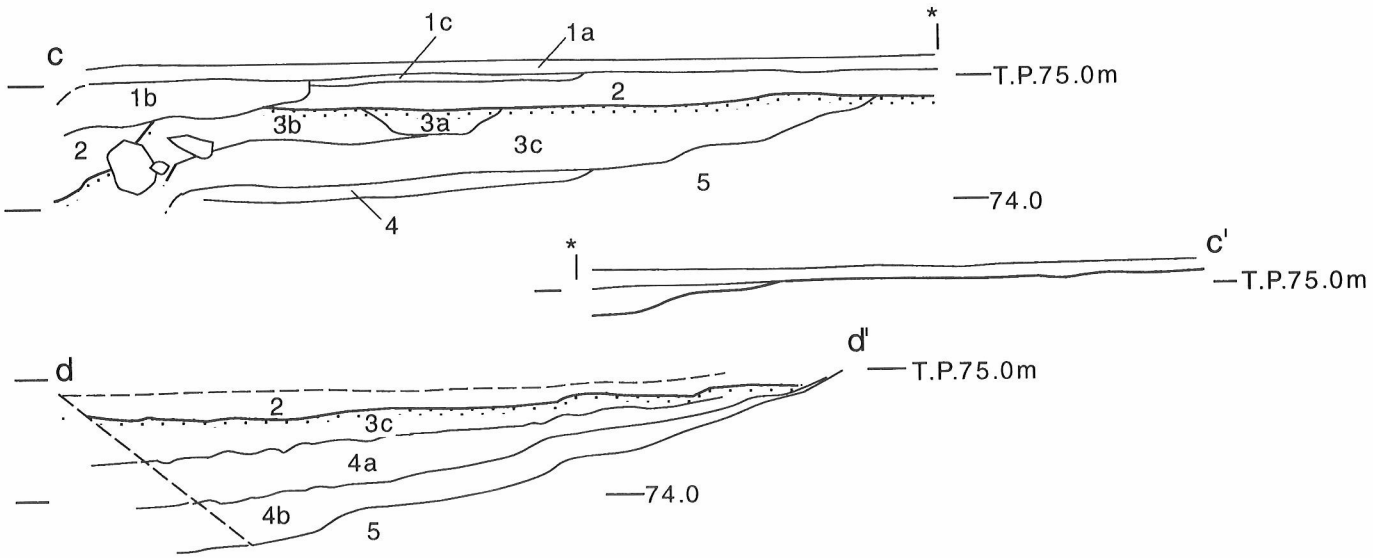


図17　C地区3a～3c層、5層上面で検出された遺構の平面図と同地区堆積層断面図

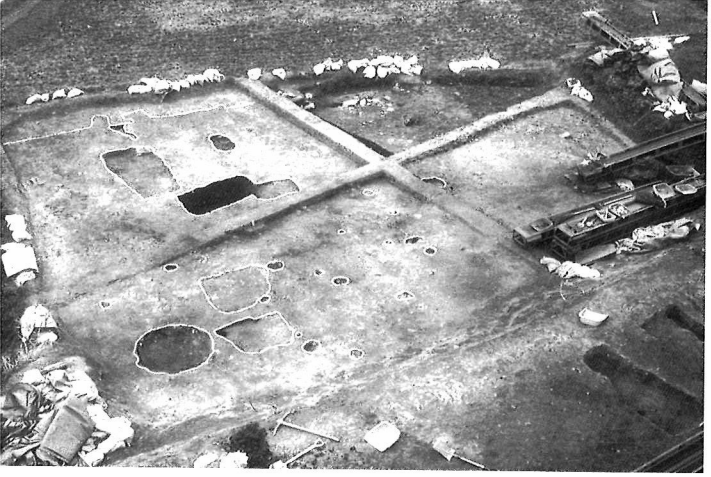


図18　C地区3層および削平された5層上面の検出状況。北西方向に撮影。

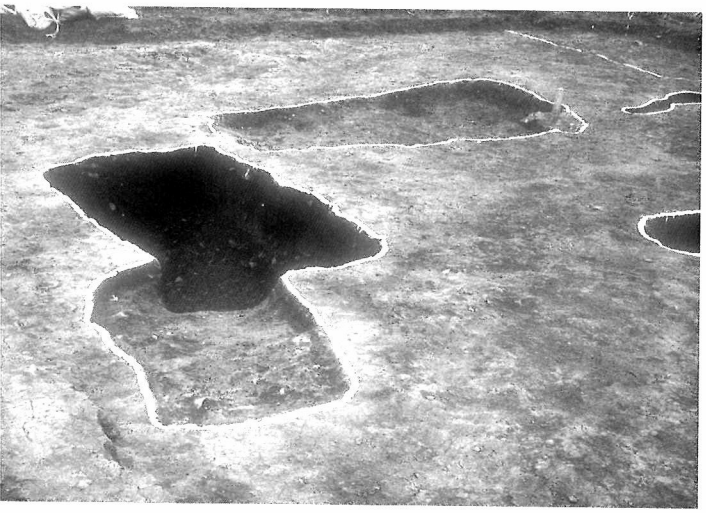


図19　C地区南西部、土壙11、12、14。南西方向に撮影。長方形土壙の深さは浅・深多様であった。この写真では深い方(土壙12)が浅い方(土壙14)を切っていた。

りの領域では2層が現れた。この層準の5層上面は削平されているが、断面の観察で、2層の下に伏在する5層上面は、西に向かって高度を下げ、緩やかな斜面をなしていることがわかった。この上位の一部に分布する4層は、その傾斜を減少させるように斜面下部ほど厚く堆積していた。3層の残存する上面は、南東部がもっとも高く、全体としては北西にわずかに高度を下げており、旧状をいくぶんかは反映しているように思われる。

3層上面で検出された遺構は、長方形土壙、やや不整形な土壙、円形土壙、ピットである(図18)。長方形土壙(図19、土壙11、12)は、A地区で検出されたものと同種である。南北あるいは東西方向に配置されること(ただし土壙12の長辺方向は後述する土壙14、15、16と直角に並ぶ)や、プロポーションの取り方にパターンが感じられること、また、盛土である3層に掘り込まれていること、すなわち造成された平坦面の西寄りに分布することなども共通する。これらのことは、この遺構の機能を推測するとともに、3層による造成の形状を考える手掛かりになる。たとえば東寄りの後世に削平された部分に土壙12のような深さ数10cmの土壙があったとすると、3あるいは5層上面は20%ほどの勾配が想定される。その斜面に長方形土壙が点在する情景が想像される。歪んだ台形をなす土壙15、16は、そのような土壙ともみなされる(図20)。それぞれ8cm、11cmと浅く、上部が削平され、下底部分の不規則な凹部が残存しているのであろう。前者は長辺・短辺ともに1.4mで後者も長辺が1.4m、幅は90cmである。ともに「拡幅変異形」とみなせる。土壙14は、長辺1.4m、幅70cmで、上述した2つの土壙の基本単位のようにみえる。ほぼ長方形の平面形をなすが、大きさは典型的な長方形土壙とは異なる。以上3つの長方形土壙の長辺の延び方向は南南西 - 北北東方向で共通する。

調査区南西部では、上述した土壙15、16を切るかたちでピットが分布する。これらは南西北東方向に、0.9～2.5mの間隔で、2列に配列すると考えられる。また、中央東寄りの3ないし4個のピットも列をなすようである。いずれも斜面の傾斜方向に直交する。柵ないし杭の跡と考えられる。

C地区南西隅では、円形土壙1が検出された(図21)。検出面での直径は1.6m、深さは約40cmであった。他の遺構とは明らかに異なる緑灰色の砂礫質シルトで充填されていた。垂直の壁面で、明瞭な平面形をなす。2層状面から見積もった深さで約60cmと浅い。掘削を急いだため、検出層準での記録はとれなかったが、3層上面より上位、おそらく2層上部から掘込まれたと判断される。土壙内からは、16～17世紀の陶磁器が出土しており、2層以下の遺構のなかでもっとも新しいものである。

ほぼ楕円をなす東西方向約1mの土壙13は、後述する石組2との関係から溝の残存とも考えられる。その他2、3の不整形なピットが散見されるが、巨礫の抜け去った跡かもしれない。

調査区の西辺部では、2か所で石組が検出された。ともに3層中ですでに破壊され、さらに2層堆積時に残存した上部が破壊されている。南側の石組2(図22a,b)は、上述した土壙13の長軸の西方延長上で、約1m離れた位置から、2mにわたって南向きに、小型の巨礫2個分、0.4～0.5mところによって0.7mの高さで石垣面が残存していた。

図20　C地区東部3層上面の遺構検出状況。北方向に撮影。手前は円形土壙1、その前方の左が土壙15、右が土壙16。

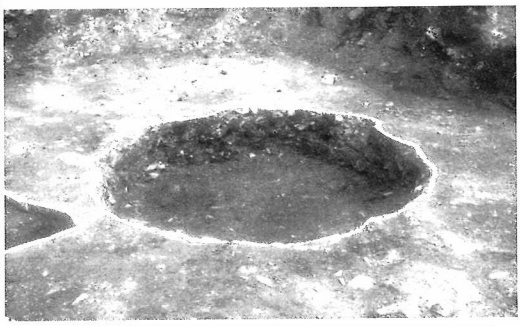


図21　C地区南東部、円形土壙1。南東方向に撮影。

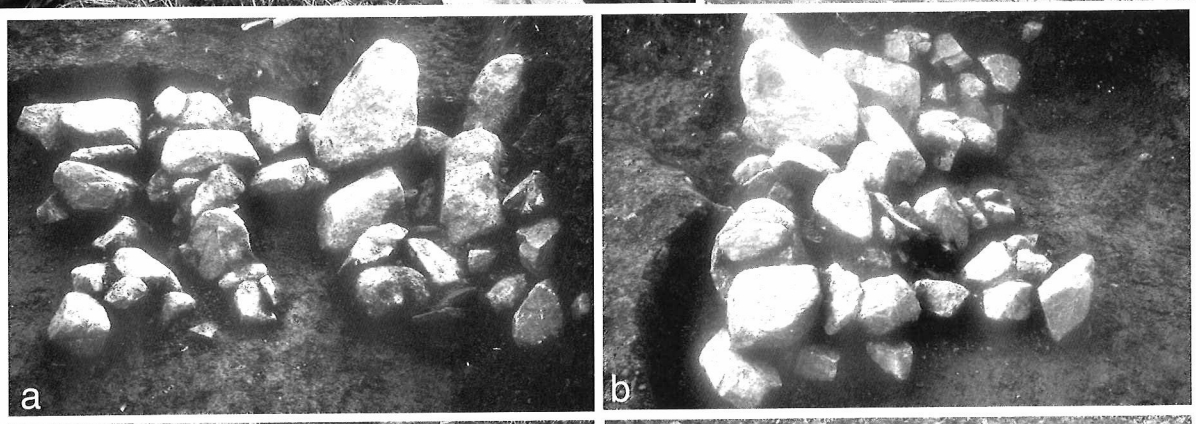


図22　C地区西部、石組2の検出状況。a:石垣裏側から南方向に撮影。b:側面を西方向に撮影。右方に向かって石組が低くなる。

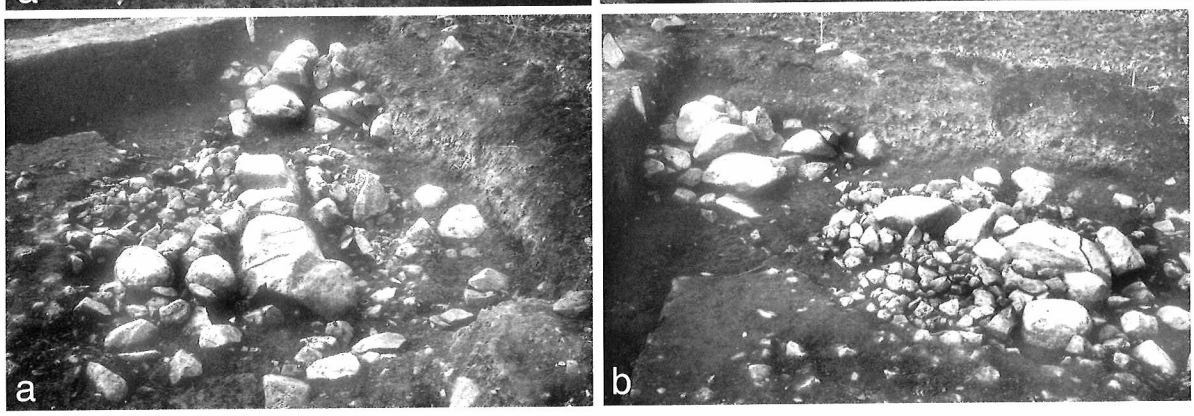


図23　C地区西部、石組3の検出状況。a:側面を南西方向に撮影。b:石垣裏側から西方向に撮影。

石垣の裏側には、東西方向にのびる石垣表面に対して直行するかたちで、小型の巨礫～大礫が、不規則だが4列、石垣面から約1m離れたところまで並べられていた。これらの石列の間隔は20～30cmで、中礫を多く含む裏込め土で充填されていた。石垣の前方(南側)とくに遺構はみとめられず、北側の石垣上面に対して、一段低い面がひろがっていたように見える。このような石垣やA地区の溝にともなう石組は、建物にともなうものではなく、排水を意図した斜面加工の一部と考えられる。

北側の石組3(図23a,b)も石垣跡と考えられる。小型の巨礫を南西-北東方向に揃え、北西向きの石垣面を作っている。残存高は小型の巨礫～粗粒の大礫1個分、0.2～0.3mであった。裏込めには、砂礫質シルトマトリクスの大礫から中礫が用いられていた。調査区北部では、2層中に多くの礫が散乱しており、3層上部(3a,b層)を欠く部分があった。このことから、2層堆積時に石垣が著しく破壊されたと考えられる(図24)。また、この石垣は、北東方向に延びており、後述するE地区の石組4まで連続していたと考えられる。

図24　C地区北部、2層中の礫の散布状況。北西方向に撮影。この場所のほかに調査地では、いくつかの場所で小型の巨礫から中礫までの礫が散乱していた。これらは3層堆積の初期に構築された石組遺構が破壊された跡と考えられる。

4.1.4　D地区

本調査区(図25)は、調査地のもっとも低所にあり、調査

図25　D地区、5層状面で検出された遺構の平面図

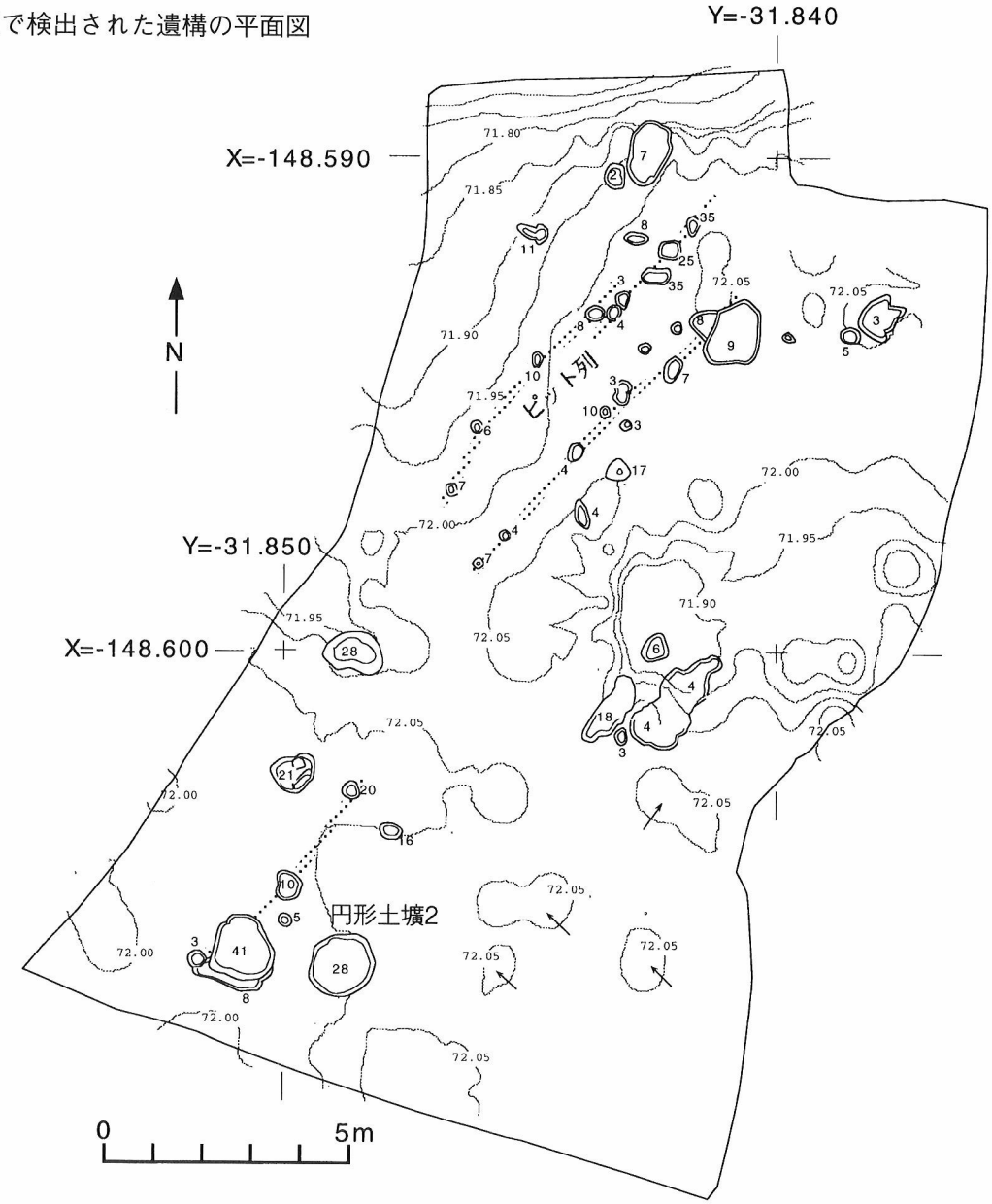
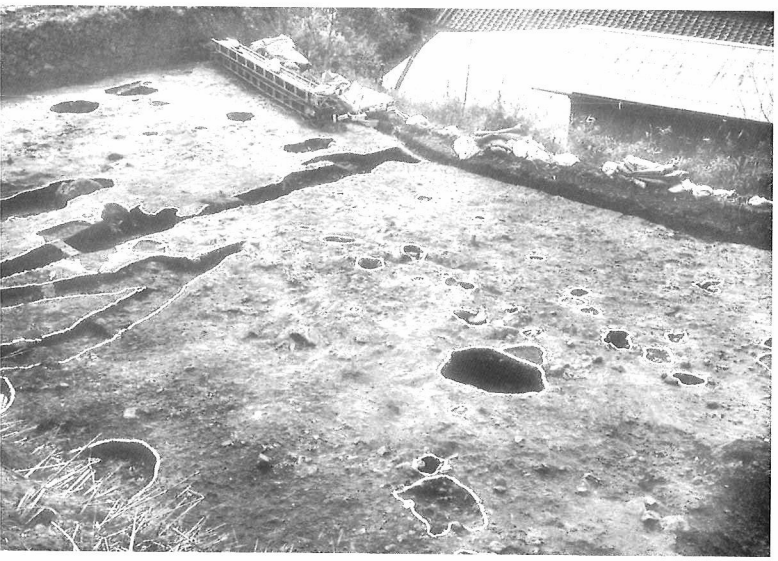


図26　D地区の5層上面の遺構検出状況。南西方向に撮影。左寄りに見られる4本の溝は1層から掘り込まれたもので新しい。



時の地表面はT.P.71.9mであった。南北21m、東西13mで、約459m²。東側に隣接するE地区に対して約3.5m低く、急な崖面に2段の石垣が構築されていた。この北寄りの一部分を機械掘削したところ、裏込め土の下に高さ約2mの石垣が現れた。この石垣の裏込め土と2層との境界は漸移的であったことから、築造年代は2層堆積時と考えられる。また、3層堆積時には、E地区からD地区にかけて切土されていない急な斜面が残存していたと考えられる。

D地区では、地表をなす耕作土を除去すると、東寄り2/3の領域では5層が露出し、西寄り1/3の領域では、2に相当する堆積物が分布していた。2層を除去すると5層が拡がり、全体に遺構の検出面となった。この面の東半では、2層ないし1層堆積時に著しく削平されて平坦であるが、西半では、北西方向に傾く斜面をなしていた。調査区北西隅から北辺にかけては、北側の道路ともっとも新しい石垣の裏込め土の下で、5層上面は急な斜面をなして落ち込むようであった。とりあえず検出した不整形なピットは、この領域の削平、整地に際して生じた礫の抜け穴であろう。5

層上面が斜面をなして残存する西半部でも土壙、ピットが散見される。ただし、北西部では小さい円形のピットが列をなしていた(図26、27)。約1.8mの間隔をおき、2列平行に並んでおり、ともに長さ約7mである。ピット間の距離は隣接しているものから2mあまり離れているものまであり、不揃いであった。南西部にもピットが数個集まっている場所があり、列をなしているようにも見える。すでに述べたC地区のピット列でも同様で、これらはもとの斜面の傾斜方向に直行して作られたようである。

図27　D地区北西部、5層上面のピット列。南西方向に撮影。

調査区南西部では、円形土壙2がみつかった(図26、写真の左上前方)。直径1.5m、深さ28cmであった。この西側で2m離れた場所にも、不整形だが同程度の規模の土壙があった。深さ41cmで、円形土壙と同種のものと思われる。これら2つの土壙は、2層上部で検出された。

4.1.5　E地区

本調査区(図28)は、調査領域に含まれる棚田の中段にあたり、T.P.75.4m。南北35m、東西12mで、面積は460m^{2}であった。機械掘削後には、5層堆積物が露出した南東部を除き、ほとんど全域にわたって、ほぼ平坦に2層が分布していた。同層には炭片、焼土、土器片が多く含まれていた。3層上面が深くなる西半部から北部一帯では、2層が厚く堆積していた。その領域では、2層は2枚に分層でき、下部層(2b層)は上部層(2a層)にくらべて砂礫とくに中礫以上の礫に富んでいた。3層上面は、調査区の西寄り1/3の領域で急に落ち込み、北西部ではその下に、平坦面がみられた。東寄りの高い部分の北部では、およそ北向きに緩やかな斜面をなして低くなっていた。ただ、北東隅では、小型の巨礫以細の礫をまじえる砂礫層が3層中に挟まれ、下位の第3層と第5層をきるかたちで分布していた。南東方向から流下した流路充填堆積物で、流路の中心は本調査区の北に隣接する道路下にある。調査地より下方斜面に発達する比較的新しい沖積錐ロウブの発達に寄与した土砂はこの流路からも流出したと考えられる。またこのことは、人間の営力による3層堆積時における斜面の状況をうかがわせる。南東部では、5層の上面が露出して高く、2a層以下の堆積層は分布しない。

上述した西部一帯に続く斜面は3層堆積時の斜面の様子を示唆する。E地区の東に隣接する棚田の高度はT.P.77mあまりで、その南部の高まりから、北西向きの緩斜面が続いており、それを次に述べる石組5あるいは失われたその延長の造作によって区画したと考えられる。石組の失われた延長部分では、3層上部から掘り込まれたと推定される土壙30の検出上面の北西側が著しく削られていることからも、2層堆積時に、石組が破壊され、落ち込みの斜面が後退したと考えられる。

調査区南西隅では、小型の巨礫の列を中心にした石垣跡とみなせる石組4(図29e～h)が、さらに、その斜面上部側の隣接する場所から、すでに述べた北北東方向に延びる石組5(図29a～f)が検出された。前者には2列の石列がみとめられる。そのうち調査区隅でわずかに露出した石組は南北方向に延びていた。西向きに石垣面を整え、裏込めには砂礫質シルトをマトリクスとする中～大礫が用いられていた。この石垣は、2層堆積時に構築されたものと考えられ、現代の棚田の崖にみられる石垣の下に埋没していた。斜面のより上部側へ2.6m離れた場所にもう一つの石列があった。約2.8mの長さで南北に連なるが、材料とされていた巨礫、大礫は大きさが不揃いで、石垣面を作り出した様子は失われている。またこれらと同じ粒径クラスの礫が周辺に点在していて、石垣が

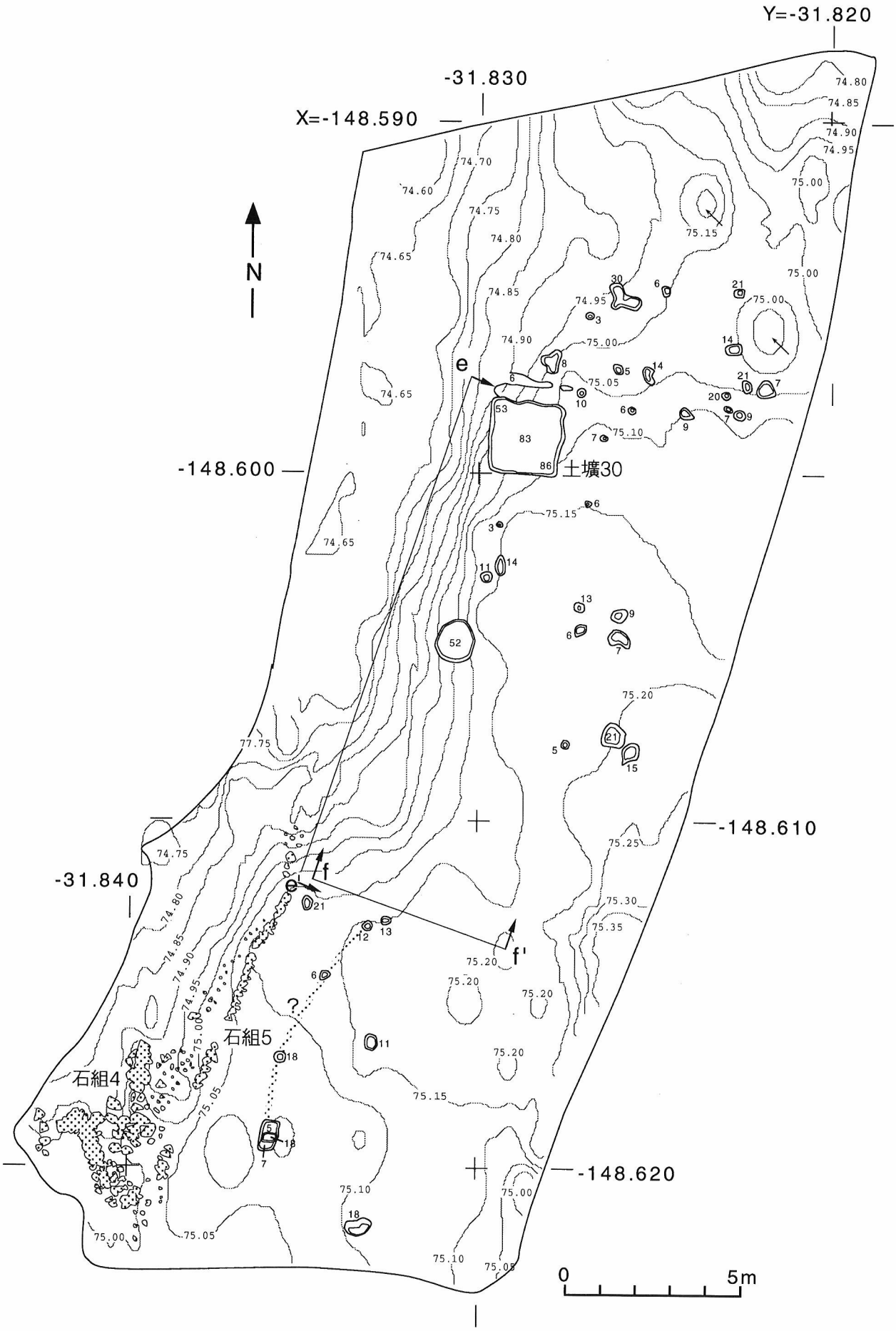
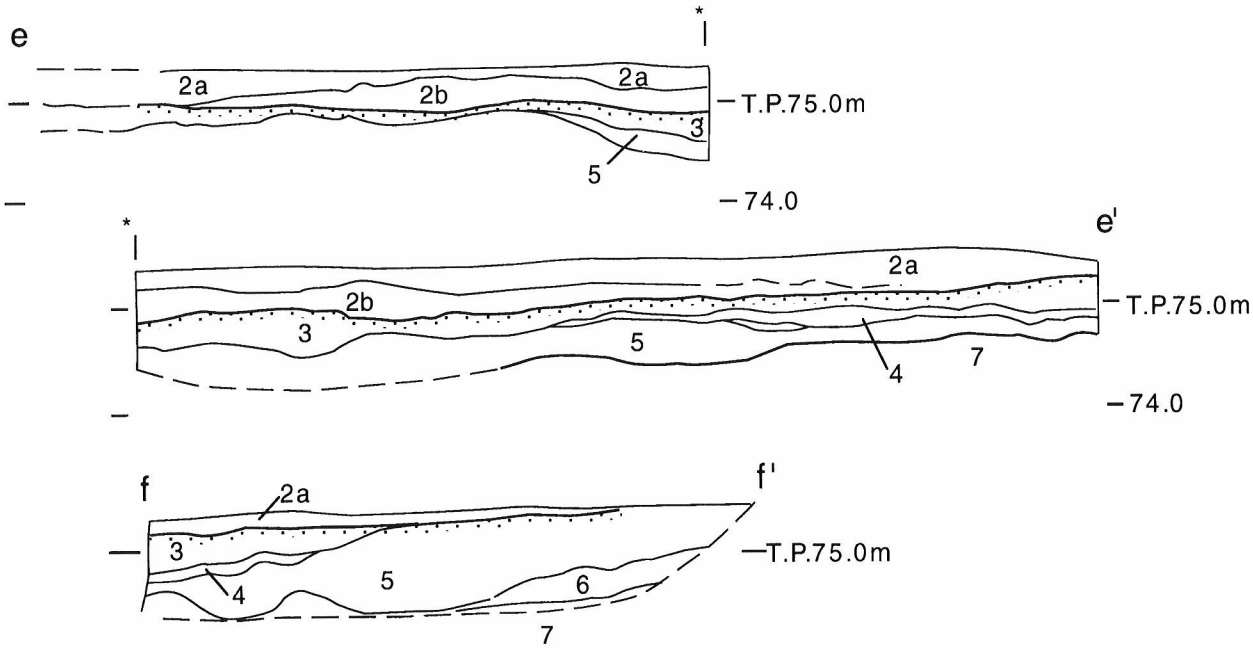


図28　E地区3層上面で検出された遺構の平面図と同地区堆積層断面図



堆積層の色調と粒度

2a 10YR 3.5/2 中礫～大礫まじり粘土質シルトブロック土(焼土、炭片、土器片を含む)
下位の堆積物(6,7)のブロック土。北部では10YR 5/4 シルト質粘土まじり巨礫～中礫＋砂
2b 礫＋粘土～礫
3 2.5Y 4/2 砂質粘土質シルト(炭片、土器片を含む)
4 2.5Y 4/2 わずかに砂質シルト質粘土
5 10YR 5.5/6 シルト質粘土＋大礫～細礫
6 10YR 5.5/6 わずかに砂礫質シルト質粘土
7 10YR 5.5/6 細礫～砂に富むシルト質粘土

(図28 つづき)

破壊されていることがうかがわれる。しかし、基底部1段分の石材がもとの位置からはほとんど移動せずに残存した状態だと思われる。石垣の裏側には、中礫を主とする裏込め材料がみとめられた。

石組5は、石組4のさらに斜面上部側の隣接する位置から、途切れた部分はあるが、北北東方向に約10m連なっていた。石組材料には粗粒の大礫～粗粒の中礫が多く用いられ、西向きに石垣の面を作っていた。2、3個分積み上がった状態で残存していたが、礫の大きさからみて、もとの状態でもさほど高くはなかったと思われる。裏込めには砂礫質シルトをマトリクスとする全体に細粒の中礫が用いられていた。石組の規模に対応して、裏込め部分も小さく、幅数10cmか不明瞭なところがみられた。石垣の前は、中礫を多く含む2層堆積物が分布し、破壊に際して一様に斜面下方側へ3層上面の堆積物が落とし込まれたことがうかがわれる。以上3列の石垣は、斜面下方のものほど新しい。

このほか、調査区南部では、斜面傾斜方向に直交して並ぶような3ないし4個のピットがみつかった。ピット間の間隔は2～2.5mと大きい。調査区北部にもピットが比較的密に分布する一画があった(図30)。3層上面の緩斜面が、いくらか保存されている場所であろう。2列のピット列が傾斜に直交しているように見えなくもない。中央部の5層が露出した領域でも、数個のピットが分布するが、あまりまとまりがなく解釈できない。

このピット群に隣接した場所で、土壙30(図30、右)が検出された。長辺約2m、短辺の短い方をとると2m弱で、南北方向に配置される長方形土壙の「拡幅変異形」と考えられる。深さは、斜面上部側で86cmあり、同種の土壙になかではもっとも深いA、C地区での切り合いからみて、この土壙はピット群より古いと考えられる。

調査区中央部の2b層上面では、少し小さい直径1.1mの円形土壙がみつかった。他地区の円形土壙と基本的には同種と考えられる。

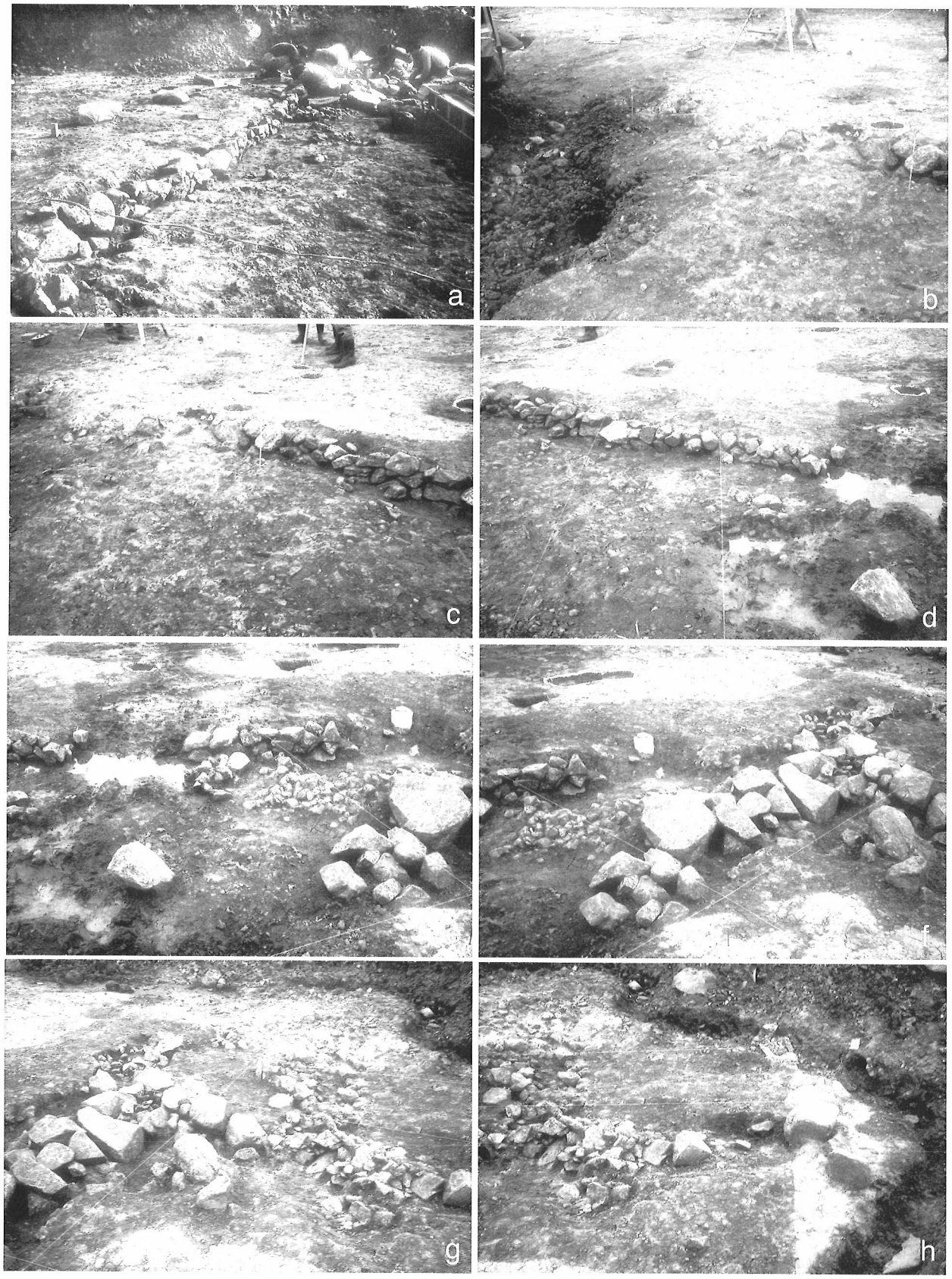


図29　E地区北西部の1層直下で検出された石組4、5の石垣跡。a:石組5の検出状況。南方向に撮影。b～d:石組5の北端部～中央部。東向きに撮影。e:石組5の中央部(後ろ)と石組4の北端部(手前)。東向きに撮影。f:石組5の中央部から南部(後ろ)と石組4の北半部(手前)。東南東方向に撮影。g:石組5の南端部(左上の列)と石組4の南半部。南東方向に撮影。写真右半は裏込めの大礫～中礫。h:石組4の南西部と南西隅の石組(新しい石垣)。南東方向に撮影。

4.1.6　遺構のまとめ

以上の遺構の調査結果から、B地区を除く調査区において出現する遺構は、およそ古い順に、(1)3層中に埋没した石組(石垣)遺構、(2)3層上部および上面から掘り込まれた長方形土壙、(3)長方形土壙を切って、3層上面付近から形成されたピット列、(4)石組3、4の石垣、(5)2層上部から掘り込まれた円形土壙、であった。これに加え、A地区では、(2)とともに溝(1条は石組をともなう)が検出された。(3)と相前後して形成されたとみられるピットは調査区で散見された。

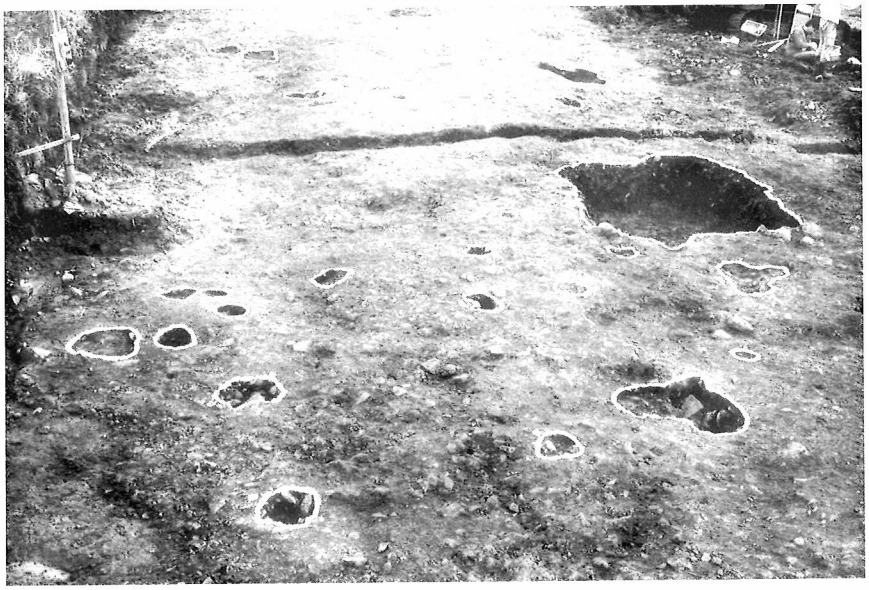


図30　E地区北部のピット群と土壙30。南南西方向に撮影。3層上面が北方へわずかに傾斜を強めて高度をさげる傾斜変換線付近に集まっている。ピット列を構成するようにも見える。右端は土壙30。

これらの遺構が形成された斜面のようすは、(1)の時期にはどの調査区でも緩傾斜地(局地的には急傾斜)であった。(2)の時期、あるいはその直前には、A地区では平坦面が造成されていたが、下方のC地区へはやや急、E地区へは緩やかな斜面であった。(3)の時期でも斜面の状況はあまり変化なかった。(3)から(5)の時期に間にすべての調査区で、5層を大きく切土し、斜面下方に盛土した、階段状の平坦地(耕作地)が造成された。(4)の石垣はそうした変化のなかで作られるのであろう。この造作は1、2回繰り返され、現代の耕作地の形状になった。

それぞれの遺構の性質・機能は以下のように推測される。

石垣はいずれにせよ緩傾斜化、平坦化を目的とするが、土地区画をともなう。検出された大半の石組は、おおむね現代の棚田の境界の斜面上部側に隣接してみられ、(1)の時期に土地改変のある種の傾向が決まったように思える。ただ、石組のなかには、こうした性質をもたない局地的な造作を目的としたものもみられた(石組溝、石組2)。

(2)の長方形土壙は、墓穴と判断される。前節までの記載で掲げた特徴とともに、寺院核心部の外縁に墓地が分布するのは不都合ではない。西向きの斜面という立地も好条件である。いっぽう、3層分布域に長方形土壙の分布が重なるのも特徴的である。造成された平坦地では西寄りの盛土部分にあたる。性質不明とされているが、第2次調査区でも同様の事例がみられる。掘削が容易な土質を選んだということでもあり、一枚の敷地の中でも中央のあると邪魔になるということでもあろう。遺体が残存しないのは、再葬のために掘り出されたためと考えられる。充填堆積物が、周囲の3層とあまり違わないのも、掘削した堆積物を同じ場所に戻しているからである。またこのことは、機能時に開口していないということを示している。数mの間隔をおいて2、3基ずつまとまって分布する状況は家族墓を示唆する。

ピット列については、次のような推測をした。墓穴を切っているので、ピット列が形成された時期には、少なくとも調査区の中では、墓穴は掘られなくなった。緩斜面は残っており、石組材料の多くは、散逸し、また残存部分は浅いか埋没した。斜面の傾斜方向に直交していることを重要視し、列が短いということも考慮すれば、土地を積極的に区画する意図が感じられない。斜面土壌の流失を防ぐということであれば、土留めの杭跡ということにもなり、斜面は畑であったかもしれない。(4)の新しい石垣はこの後に築造される。耕作地への転換がこの時期にあったとも考えられる。客坊城に立籠るということであれば、防御柵ということにもなる。C、D地区で2列並行する特徴も興味深い。E地区北部のピット群も、列とみなせないこともない。いずれにせよ、この時期には、土地利用はかなり変化したと推測される。

円形土壙は井戸にしては浅い、耕作地に付随する水溜め、肥溜めの類であろう。D地

区では、2基並んでいるが、いずれにせよ各調査区、つまり各棚田造成面の中に孤立して作られる点が注目される。調査時点では考えつきもしなかったが、今日に至っては、2層上部に耕作土が挟まれているかどうか、土壌微細形態から検証し得るだけに、試料を採取しなかったことが悔やまれる。2層堆積期間中のいく度かの耕作地の展開を経て現代の作土層(1層)が成立しているのであろう。

4.2 おもな出土遺物

本調査で出土した主な遺物を巻末にまとめて掲載する(図31～40)。これらは、採集された遺物の一部であるが、堆積層と遺構の年代を推定できると思われる。掲載した遺物個々の記載は、遺物各図に対応する一覧表(表2～4)を参照していただきたい。遺物の集合状態に対する体系的な分析は行わなかった。

A地区では、ほとんどの遺物は遺構検出面より上位の2層と3層の上部、遺構内およびその付近の3層相当層から出土した。同層からはおもに13～14世紀の遺物が出土し、10～11世紀の遺物も混じっていた。2層からは、15～16世紀以前の遺物が出土した。他の調査区もほぼ同様の結果であった。銭貨は鋳造年代からは隔たった中世の後半にも使用されていたのであろう。B地区から出土した蓮華文軒丸瓦や、C地区の黒色土器などの10～11世紀の遺物は、客坊寺の創建年代を示唆する。

C地区では、円形土壙1から16～17世紀の陶磁器が出土するとともに、2枚の北宋銭が出土した。また、18世紀の伊万里焼が2層から出土している。C地区で検出された石垣の裏込め土には、13～14世紀の土器類が、石垣の外(崩壊した前面)の堆積物には16世紀以後の遺物が含まれる。これらのことから、2層の堆積し始めた年代やそれにともなう石垣構築の年代がこの時期であり、調査地周辺では、耕作地が整備されていったと考えられる。

いっぽう、E地区で検出された石垣の内外の2層からは、13～14世紀の瓦器、土師器などが採集された。また、15～16世紀のものと思われる陶器や、仏教に関係する一石の五輪塔、仏具の一部と思われる瓦器(あるいは鬼瓦の一部か?)、土仏などが出土した。遺構の年代を決める手掛かりにはなりにくいが、とりあえず挙げておく。石垣は築造時から時間間隙をおいて後世に破壊され、遺構の近傍では、遺物の年代が連続的でないのかもしれない。

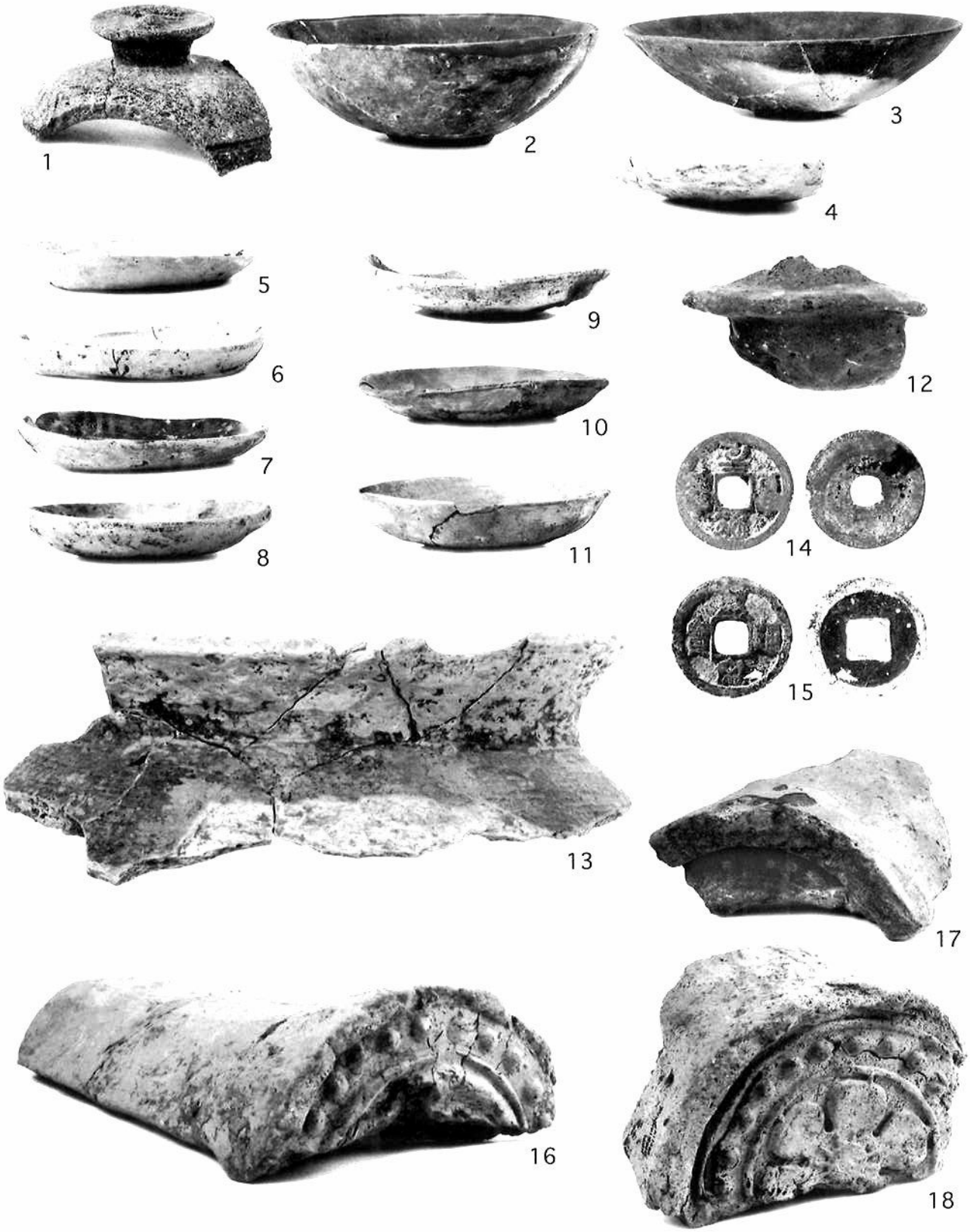
D地区の円形土壙2からは、近世の陶磁器が出土し、調査地周辺の棚田上の耕作が18世紀以前にはすでに安定した状態になっていたと考えられる。

5. まとめ

古墳時代以後の遺構・遺物が埋没していると予想された客坊山遺跡群の沖積扇状地斜面の上部で、第1次発掘調査を行った結果、おもに11世紀から18世紀までの考古資料が得られた。調査地は客坊寺跡西縁部の一画を占める。堆積層序、遺構の埋没状況や、出土遺物の相対年代、第2次・第3次発掘調査の結果、史料の記載から、調査地における歴史時代の変化は以下のように要約できる。瓦や黒色土器の相対年代から、平安時代末期には、調査地近傍に寺院が建立されたと推定される。13～14世紀に調査地の周辺は、自然の斜面を残しつつ寺域に取り込まれ、13世紀代にはこの斜面は墓域となった。調査区東部のA地区では、切土・盛土によって広範囲に造成された斜面に寺院周辺の建物、柵、溝、石垣などが構築され寺域が拡大したと考えられる。14～15世紀には、13世紀に造成された敷地の形状をほとんど改変せず、柵あるいは杭列が点在するが、それ以外の構築物は調査地の領域からは遠のいた。16～17世紀にはE、C地区の石垣が付加された。ただ、文献にみられる15世紀後半の客坊城期の遺物は、本調査区ではとぼしく、同時期の遺構を確定することができなかった。石垣の裏込めの遺物と破壊後の遺

物の年代から、15世紀末には客坊寺(城)は廃絶していたと考えられる。その後16世紀から18世紀までに、2層堆積期の耕作地の整備・造成が行われ、調査前まで続く耕作地の景観が成立した。これらのことは、古代末期の浄土信仰を反映する山裾景勝地の寺院建立と発展、争乱の大義と勝敗をオーソライズし、それ自体武力装置となる中世の寺院の終焉、織豊期に先立つ精力的な農地の開発と支配などの歴史解釈と関連する。

図31　A・B地区の遺物



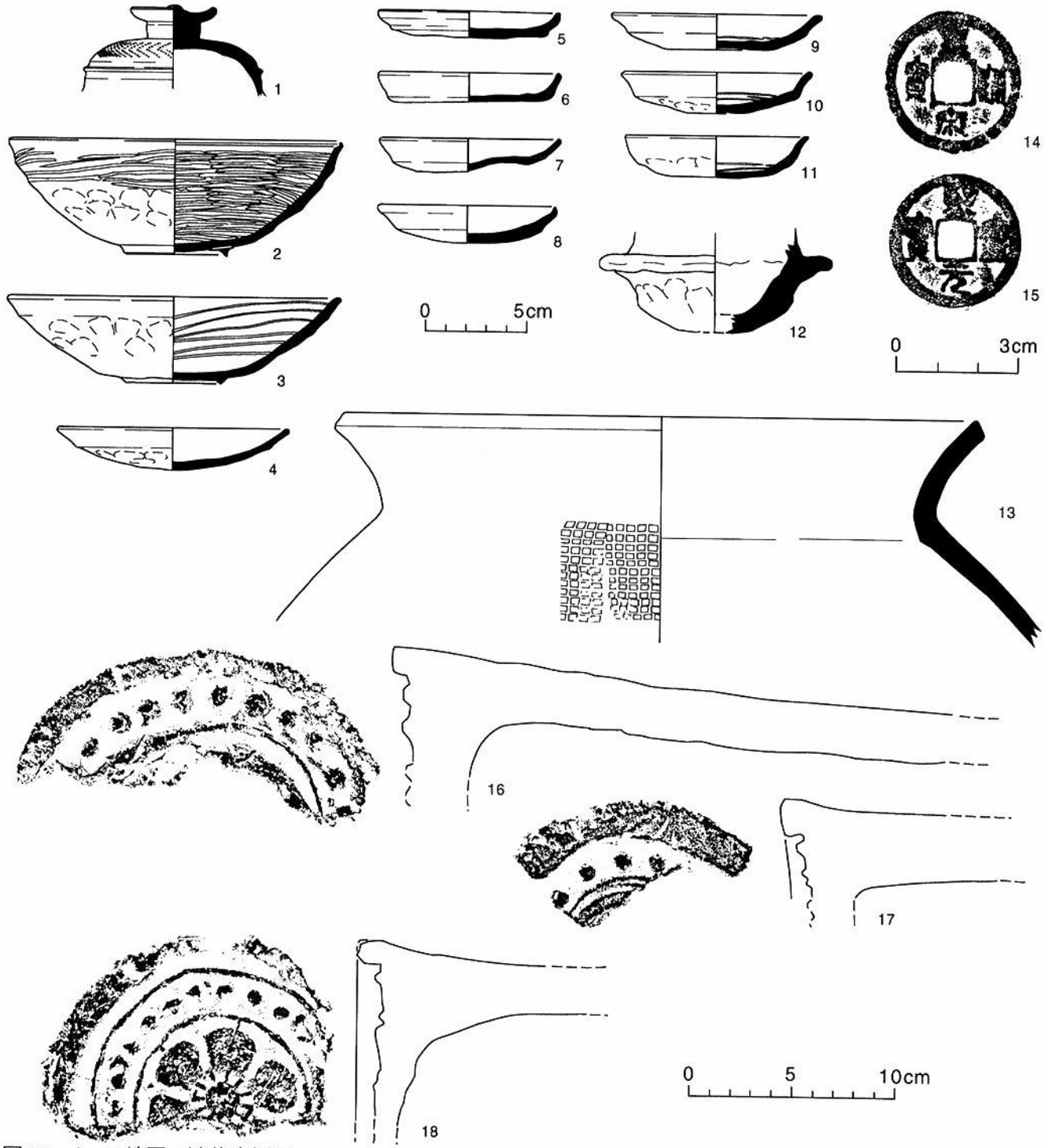


図32　A・B地区の遺物実測図

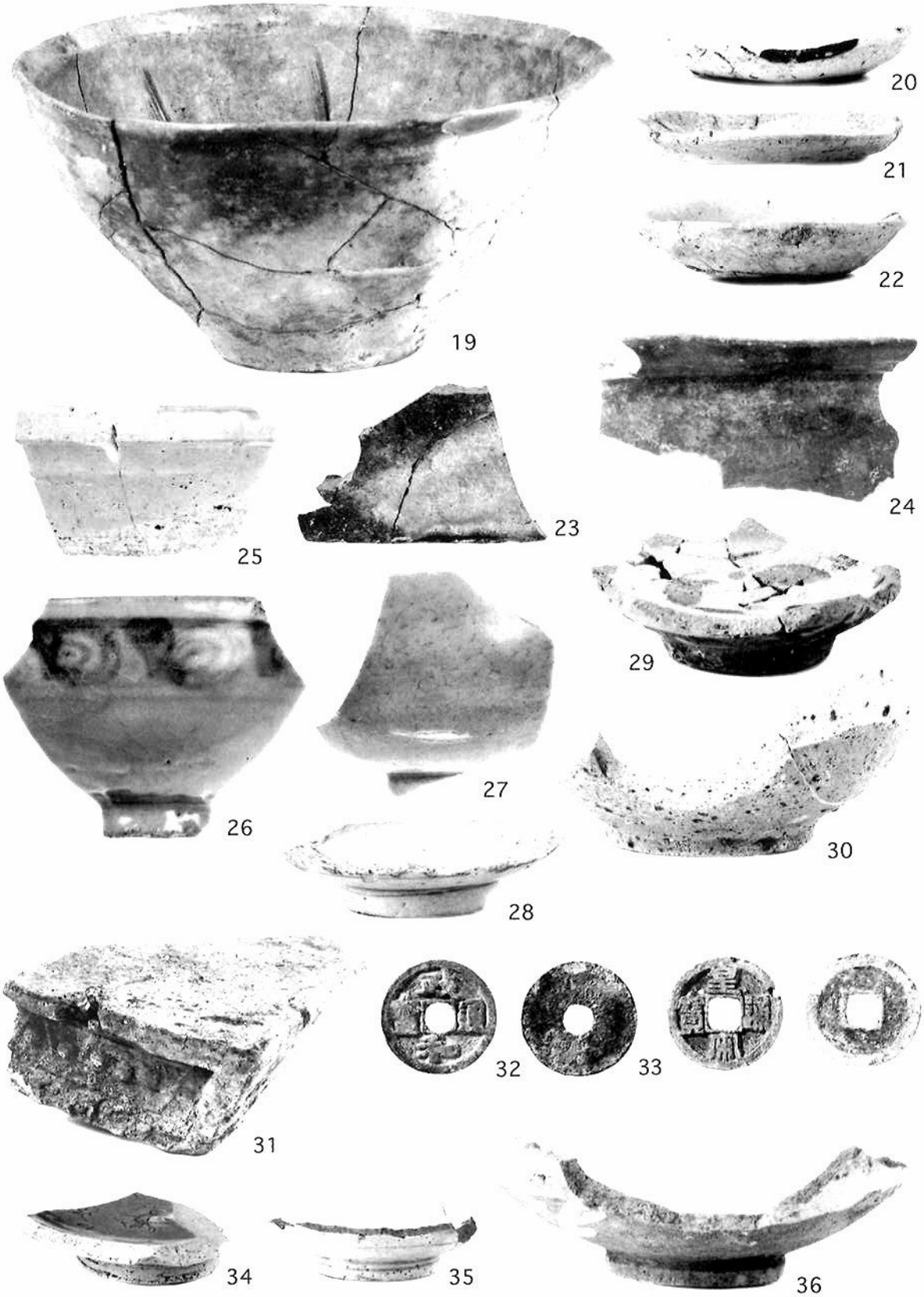
表2　A・B地区の遺物(図31、32)

遺物番号	出土地区	器種	器形	出土層	遺構	出土年月日	製作年代	特徴、色調
1	A	須恵器	蓋	2	盛土	880217	5世紀	外面は自然釉5Y5/4，本体はN4.
2	A	瓦器	椀	2	盛土	880217	13世紀前半	大和型，N5.
3	A	瓦器	椀	3b		880127	13世紀	N4.
4	A	土師器	椀	2	盛土	880218	14世紀	5YR6/6.
5	A	土師器	皿	2	盛土	880218	13-14世紀	10YR7/4.
6	A	土師器	皿	3c		880217	13-14世紀	7.5YR7/4.
7	A	土師器	皿	3b	土壙3	880202	13-14世紀	5YR6/4.
8	A	土師器	皿	2	盛土	880218	13-14世紀	5YR7/4.
9	A	瓦器	皿	2		880201	13-14世紀	N6.
10	A	瓦器	皿	3a		880217	13-14世紀	N3.
11	A	瓦器	皿	2		880127	13-14世紀	N6.

(図3つづき)

12	A		土師器羽釜ミチュア	3a		880217	13-14世紀	5YR5/6.
13	A		須恵器甕	2	土壙3	880202	13世紀	格子タタキ(亀山焼), 2.5YR6/6.
14	A	銭貨	皇宋通宝	2-3b	石組溝	880229	北宋, 1038-9年.	
15	A	銭貨	紹興元宝	2	土壙1	880205	南宋, 1131年.	
16	A	瓦	軒丸瓦3a	溝4		880218	12-13世紀	巴文, 7.5Y6/1.
17	A	瓦	軒丸瓦2-3b	土壙2		880204	12-13世紀	巴文, N4.
18	B	瓦	軒丸瓦	旧河道上面		880114	11-12世紀	素弁蓮華文, 5Y7/1.

図33　C・D地区の遺物



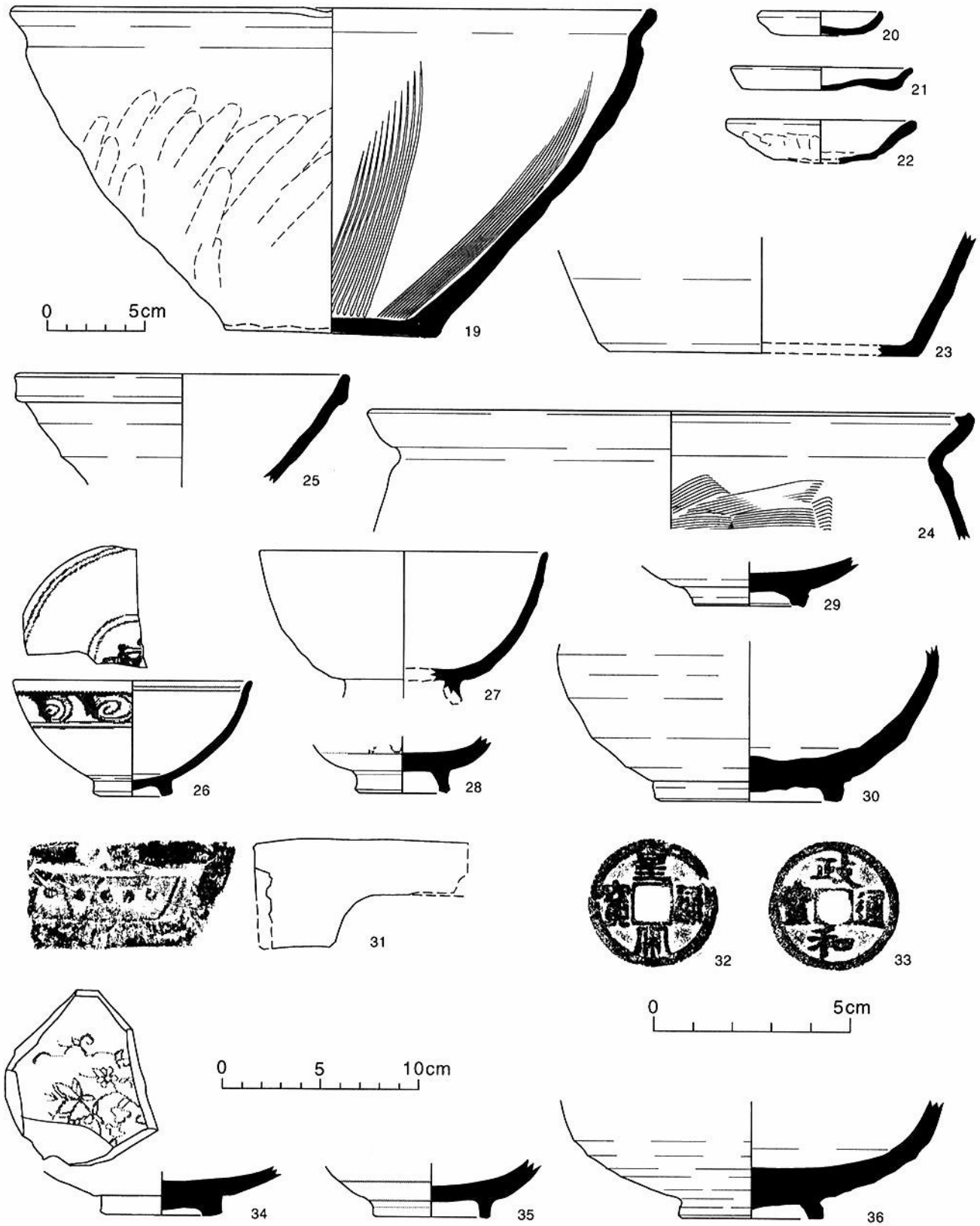


図34　C・D地区の遺物実測図

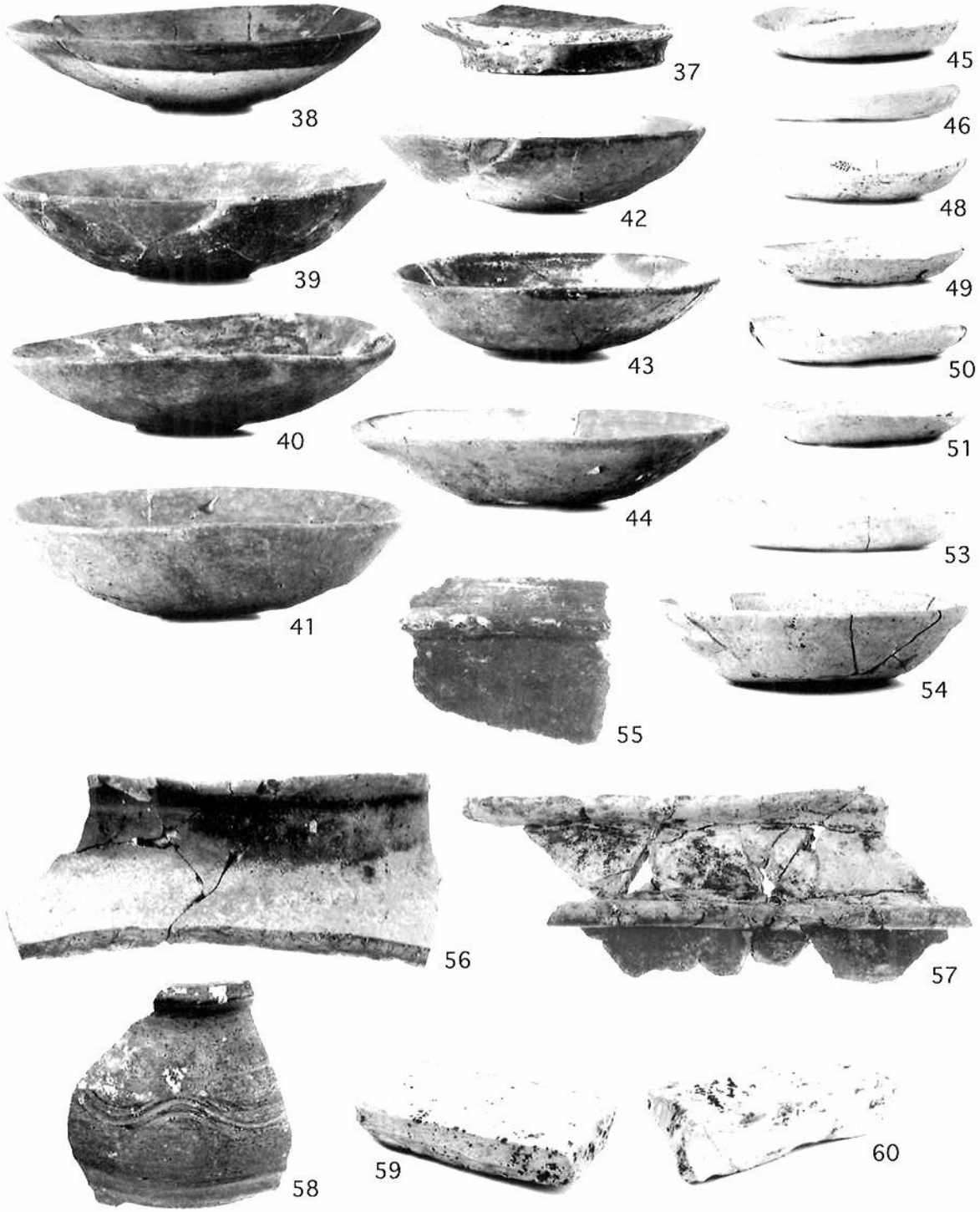
表3　C・D地区の遺物(図33、34)

遺物番号	出土地区	器種	器形	出土層	遺構	出土年月日	製作年代	特徴、色調
19	C(NW)	瓦器	擂鉢	2	石垣(外)	880224	16世紀	7.5Y6/1.
20	C(NW)	土師器	皿	2	石垣(外)	880225	13-14世紀	7.5YR8/3.
21	C(NW)	土師器	皿	3ab	石垣(内)	880224	13-14世紀	7.5YR7/4.
22	C(NW)	土師器	皿	3ab	石垣(内)	880224	13-14世紀	7.5YR6/6.
23	C	須恵器	壺?	2	円形土壙1	880213	14世紀.	N7.
24	C	土師器	土鍋	2	石垣(外)	880225	16世紀	7.5YR7/4.

(図３つづき)

25	C(SW)	白磁	碗	2		880201	12-13 世紀	2.5Y8/1.
26	C	磁器	碗	2	石垣(外)	880225	16 世紀後半	明青花染付け，7.5GY8/1.
27	C	磁器	碗	2		880126	17 世紀	伊万里焼?，7.5GY7/1.
28	C(NW)	磁器	碗	2	石垣(外)	880225	17-18 世紀	伊万里焼，7.5GY7/1.
29	C	陶器	碗	2	円形土壙１	880213	17 世紀	唐津焼，10R5/6.
30	C	陶器	碗?	2	円形土壙１	880223	16-17 世紀	唐津焼，7.5YR6/3.
31	C	瓦	軒平瓦 3c			880204	12-13 世紀?	連珠文，5Y6/1.
32	C	銭貨	皇宋通宝	2	円形土壙１	880213	北宋，1038 年.	
33	C	銭貨	政和通宝	2	円形土壙１	880213	北宋，1111 年.	
34	D	青磁	碗	2		8802**	14 世紀	龍泉窯製?，2.5GY7/1.
35	D(NE)	磁器	碗	2	円形土壙２	880309	18-19 世紀	染付けの線３条めぐる. 2.5Y7/1，胎土 7.5YR4.5/3.
36	D(NE)	陶器	碗	2	円形土壙２	880309	16-17 世紀	唐津焼，外面 5YR5/6，内面 5YR8/1.

図35　Ｅ地区の遺物



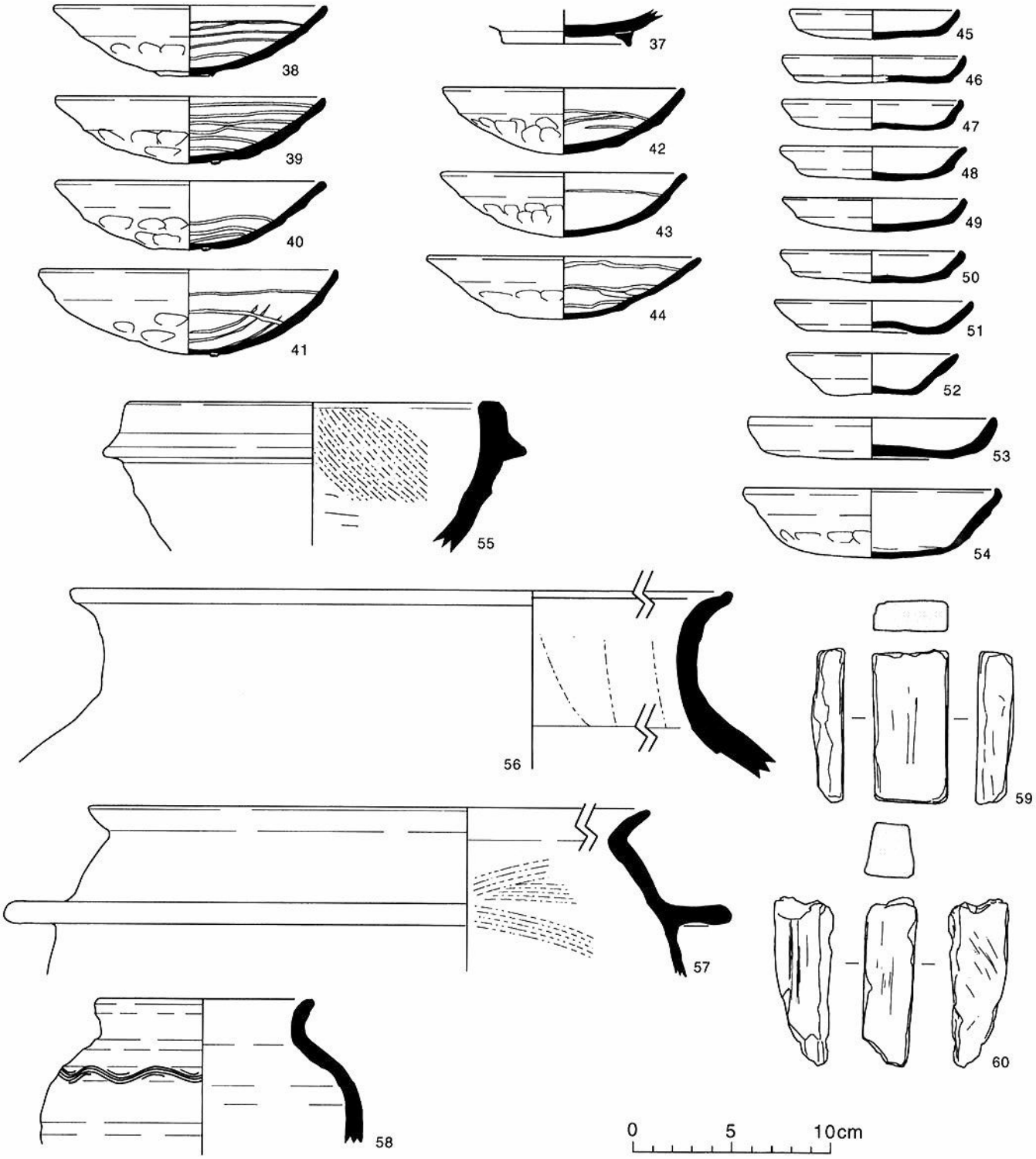


図36　E地区の遺物実測図

表4　E・C地区の遺物(図35～38)

遺物番号	出土地区	器種	器形	出土層	遺構	出土年月日	製作年代	特徴、色調
37	E(NW)	瓦器	椀	2a	整地層	880329	13世紀前半	N4.
38	E	瓦器	椀	2	石垣(外)	880323	13世紀後半	N5.
39	E	瓦器	椀	2	石垣(外)	880323	13世紀後半	N4.
40	E	瓦器	椀	2	石垣(外)	880323	13世紀後半	N4.
41	E(NW)	瓦器	椀	2a	整地層	880329	13世紀後半	N4.
42	E	瓦器	椀	2	石垣(外)	880323	13-14世紀	N5.
43	E	瓦器	椀	2	石垣(外)	880323	13-14世紀	N4.
44	E	瓦器	椀	2	石垣(外)	880323	13-14世紀	N6.
45	E	土師器	皿	2	石垣(外)	880323	13-14世紀	10YR7/4.

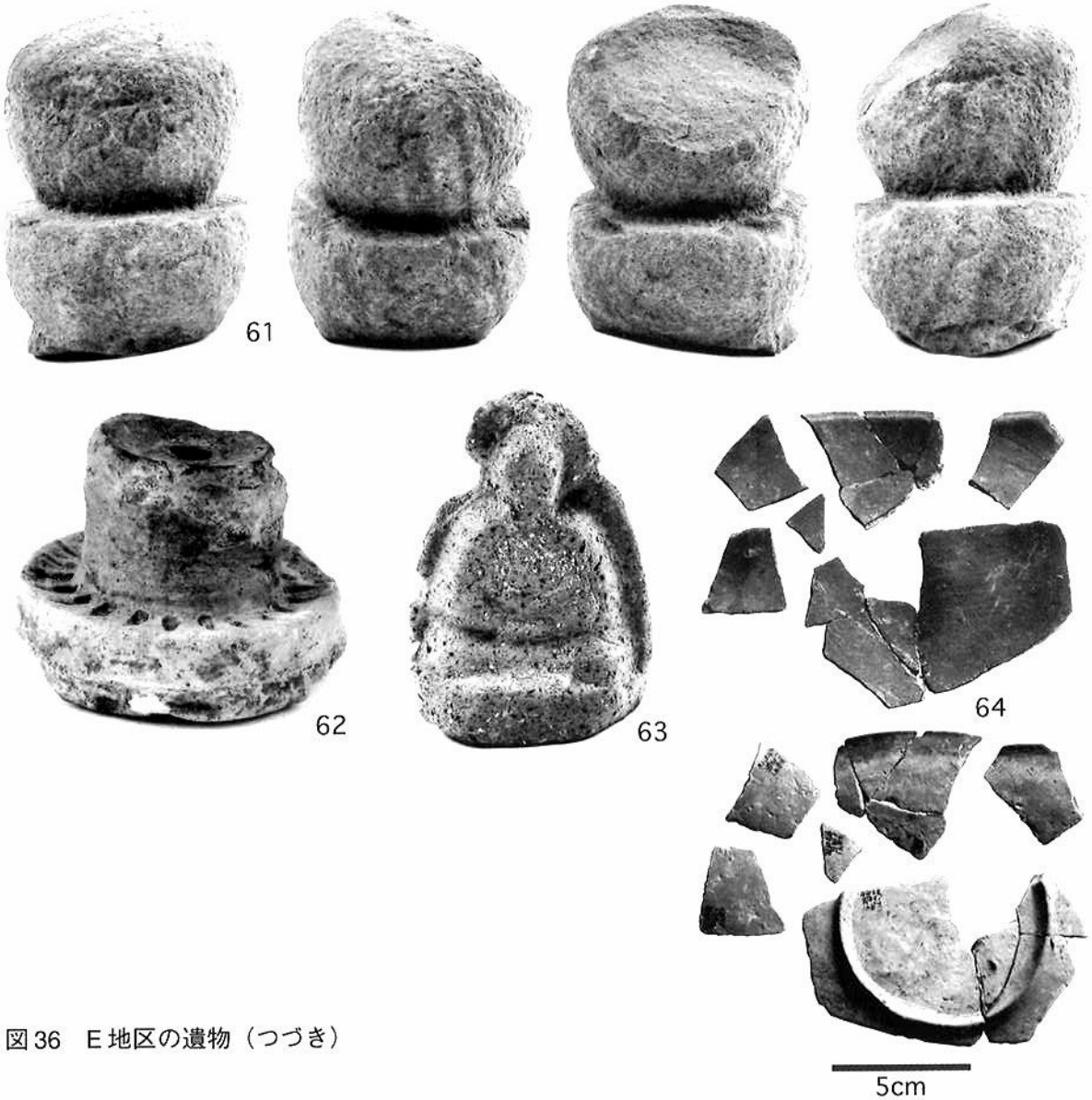


図36　E地区の遺物（つづき）

(図4つづき)

46	E(NW)	土師器 皿	2a	整地層	880329	13-14 世紀	7.5YR7/3.
47	E	土師器 皿	2	石垣(外)	880323	13-14 世紀	7.5YR7/3.
48	E	土師器 皿	2	石垣(外)	880323	13-14 世紀	2.5Y8/2.
49	E	土師器 皿	3	石垣(外)	880323	13-14 世紀	10YR8/3.
50	E	土師器 皿	2	石垣(外)	880323	13-14 世紀	2.5Y8/3.
51	E	土師器 皿	2	石垣(外)	880323	13-14 世紀	5YR6/6.
52	E	土師器 皿	2	石垣(外)	880323	13-14 世紀	7.5YR7/4.
53	E	土師器 皿	2	石垣(外)	880323	13-14 世紀	10YR8/2.
54	E	土師器 皿	3	石垣(外)	880323	13 世紀	7.5YR8/3.
55	E	石製品 石鍋	4	石垣(外)	880323	12-13 世紀	滑石製，内面に切削道具の櫛目のこす．N8．外面の鍔より下位に煤付着．
56	E	陶器　甕	2	石垣(外)	880323	12-13 世紀	常滑焼，自然釉付着，頚部内面に調整具圧痕．2.5YR5/4.
57	E(NW)	土師器 羽釜	2a	整地層	880329	12-13 世紀	5YR6/6.
58	E	陶器　壷	2a		880323	15-16 世紀	備前焼，2.5Y3/2.5.
59	E	石製品 砥石	2b		8803**	13-14 世紀	流紋岩製．
60	E	石製品 砥石	2b		8803**	13-14 世紀	流紋岩製．
61	E(SW)	石製品 五輪塔	2	盛土	880315	15-16 世紀?	砂岩製．
62	E	瓦器不明(仏具?)	2	石垣(外)	880323	15-16 世紀?	2.5Y7/2，上面の凹面に煤付着．
63	E	土製品 土仏	2		880323	14-15 世紀?	2.5YR5/6.
64	C	黒色土器　椀	2	耕土直下	880118	11 世紀	外面 7.5YR4.5/4，内面 N1.5.

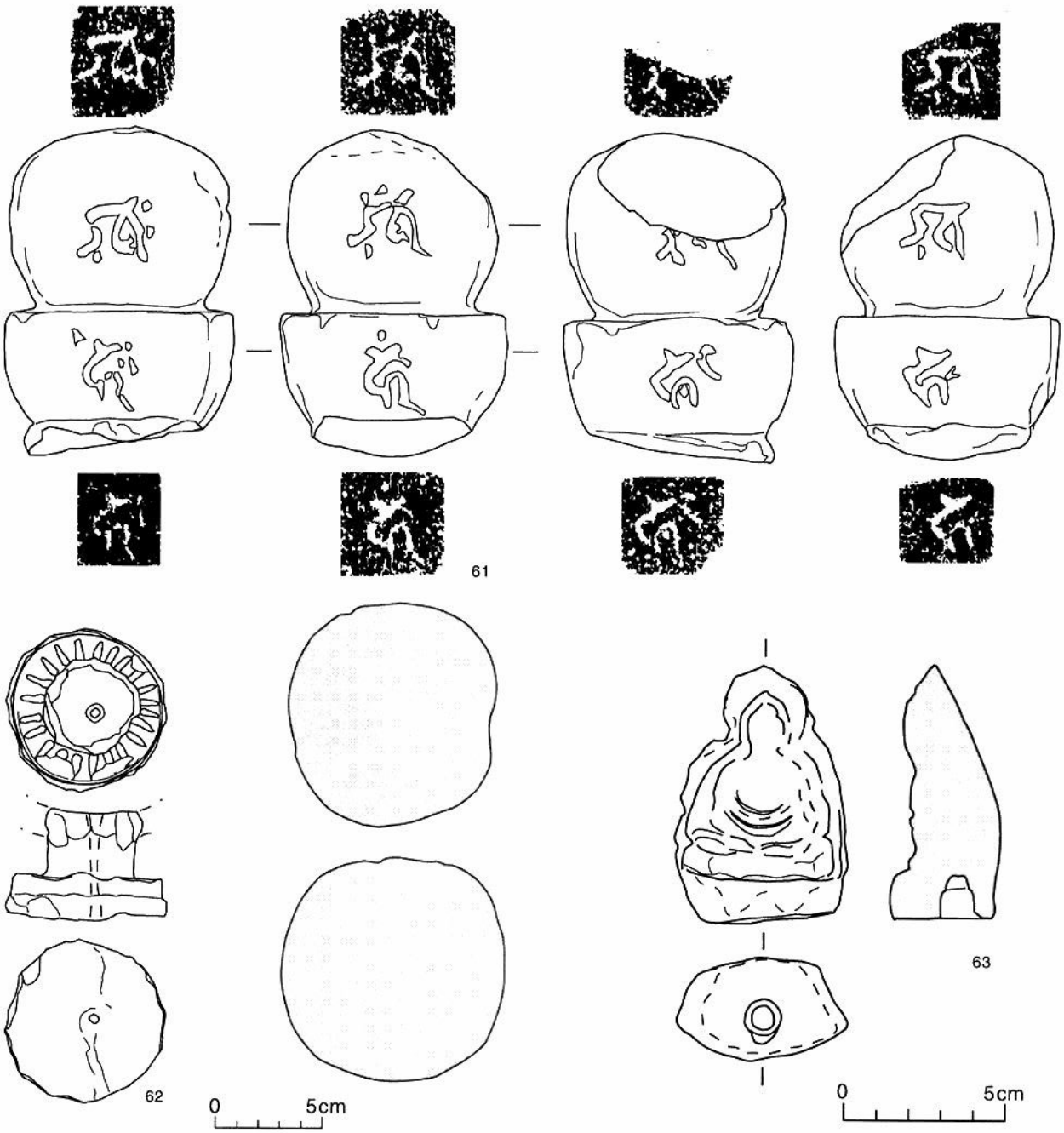


図40　E地区の遺物実測図(つづき)

文献

芋本隆裕・才原金弘（1998）「客坊山遺跡群第２次発掘調査報告」。財団法人法人 東大阪市文化財協会。

大阪府立花園高等学校 地歴部（1974）客坊山古墳群。「温故知新」、10。

辻善之助編（1964）「大乗院寺社雑事記」第６巻。角川書店、pp.325-328。

東京大学史料編纂所編（1985）「大日本史料」第８巻４。東京大学出版会、pp.630。

中西克宏（2002）「客坊山遺跡群第３次発掘調査報告」。財団法人法人 東大阪市文化財協会。

中西克宏（1996）客坊山古墳群採集の埴輪。「東大阪市文化財協会ニュース」、Vol.6, No.4, 14-18。

藤井直正・都出比呂志・河内歴史研究グループ（1966）「原始・古代の枚岡、第１部各説」。pp.186-187。

報告書抄録

書名よみがな	きゃくぼうでらあとせいえんぶのちゅう・きんせいいこう
書名	客坊寺跡西縁部の中・近世遺構
副書名	住宅建設に伴う客坊山遺跡群第１次発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	松田順一郎
編集機関	
発行機関	財団法人 東大阪市文化財協会
発行年月日	2001年12月31日
作成法人ID	42710
郵便番号	577-0843
電話番号	06-736-0346
住所	東大阪市荒川３丁目28-21
遺跡名よみがな	きゃくぼうやまいせきぐん
遺跡名	客坊山遺跡群
所在地よみがな	ひがしおおさかしきゃくぼうちょう
所在地	東大阪市客坊町1075～1077、1081番地
市町村コード	27227
遺跡番号	45
経緯度	北緯34°39′35.2″、東経135°39′09.5″
調査期間	1988年１月１月11日～３月31日
調査面積	約1520m²
調査原因	住宅建設工事
種別	寺院(砦)跡・墓域跡・耕作地跡
主な時代	鎌倉・室町時代
遺跡概要	古墳時代後期の群集墳。平安時代以後の寺院跡、室町時代以後の城跡など。

客坊寺跡西縁部の中・近世遺構
— 住宅建設に伴う客坊山遺跡群第１次発掘調査報告

2001年12月31日
発行　財団法人 東大阪市文化財協会
〒577-0843　東大阪市荒川３丁目28-21
電話　06-6736-0346
印刷　株式会社 近畿印刷センター
〒582-0001　大阪府柏原市本郷５丁目６番25号
電話　0729-72-5918

Medieval to Modern features in the western margin of Kyakubo ruined temple: report of the 1st excavation before the house estate exploitation in the Kyakubo hill archaeological site area, Higashi-osaka city, Osaka prefecture, Japan.

客坊遺跡西縁部の中・近世遺構

Contents

1. Introduction 1
2. Geomorphological setting 1
3. Procedures 2
4. Results 3
   4.1 Stratigraphy and features 3
   4.2 Selected artifacts 18
5. Conclusions 18

Distribution of the buried features of the Kyakubo ruined temple and the additional features can be estimated in the 20-30 thousands square-meters area on the upper alluvial fan slope, from 70 to 100m above sea level, adjacent to the foot of Ikoma mountain range. The temple was established probably in the 12th century (the end of Heian period), and destructed in the late 15th century (Muromachi period) due to be involved in the riot among the Bushi groups. While the remains of core facilities of the temple (e.g. foundation mound and stones, roof tile concentrations, cellar, drainage ditches, and stone-paved stairs, etc.) were found by the 2nd and 3rd excavation on the slope upper than our excavation area. We excavated from January to March 1988 in the down slope marginal area 1520m2 of the temple, and recognized the following features.

(1) The western boundary of the facility distribution of the temple developed in the 13- 14th century, on the area flattened by cut-and-fill of the slope in the eastern part of the excavation area. Though the western part covered with the artificial fill, the original gentle slope had been maintained. Bumps between the upper and lower part were rimmed by the low stone walls. (2) Clusters consisting of a few rectangular grave pits of the 13-14th century scattered over the excavation area. Clusters probably imply the kin group of decedents. (3) Alignments of the postholes made over the grave pits in some place. These may be remains of fences probably of 15th century, when the temple was armed as a fort. (4) Terraced arable land exploitation by deep cut-and-fill and stone wall construction on the bump face from 16th to 18th century.

Today, the shrine of Kyakubo village occupies on the core area of the ancient-medieval temple.